

次 目

佛教の根本と其の應用(其十一).....	本
開目鈔講話(第廿九講).....	小
近詠數首.....	
學徒に賜りたる勅語を拜して.....	大
延山紀行.....	河
寸感片々.....	議
時局認識徹底方策	筆
記事	
○本部團報	林多
○團費誌料寄附金及維持費領收	八木
大藏經要義續篇(其十五).....	木部合
本	
多	
日	
生	

號月七年四十四第

14/10.22.3

統

法財人團

統

團

發

行

財團統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正眞ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サムル所ナリ

佛教の根本と其の應用（其十一）

本多日生

釋尊の常護

そこでお釋迦様はさういふことを阿含の場合などに始終仰しやつて居る。お前等がこの法を傳へに各地に行つた場合に、いろ／＼の困難に遭遇して、これは逆も敵はぬとこふやうな事が現れたり、或は反對の婆羅門等が寄つて攻め立てゝ来るとか、譯のわからぬ者が石をぶつけるとかいふので心も弱つて来て、あゝどうも困つたといふやうな場合があつたならば、何も他の事を考へる必要はない。帝釋天王が、自分の部下に命令して、若し戦ひ利あらずして非常に困つた場合には、我帝釋天王のこの法輪を見よ、帝釋天王の居る所には所謂帝釋天王の輪が立つて居る、その總帥權の表示たるところの輪を見よ、俺には一番偉い帝釋天王が附いて居られるからといふので、この輪を見たならば汝等は勇氣百倍して、決して敵に恐れを懷くことはからうといふことを、帝釋天王が何時も號令するさうであ

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者

本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ

シデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ

將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行ゼン

ト欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ

第一佛祖正眞ノ法統ヲ擁護スル事 第

二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮

スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起

スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シ

テ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日

蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲

ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一

ノ學風ト教化ヲ守持スル事是レナリ

又知法惠國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ

炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ

アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ

セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會

又知法惠國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ

炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ

本團署則

◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ説明シ

テ佛祖正眞ノ法統ヲ擁護シ我國精神文

化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ

培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ

理想ノ文明ヲ建設スペク皆頭布教並ニ

教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌『統一』

ヲ發行ス

◎總持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參

百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セ

ラル、方ヲ雜持員トス

◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五

圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス

◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金

貳圓五拾錢ヲ輸出セラル、方ヲ正團員

トス

◎入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ

適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ

無料ニテ頒布シ國章壹個ヲ贈呈ス

◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

るが、それをお釋迦様が仰しやる。印度ではさういふことを一般に信じて居るので、それを引いて、俺はそんな幢などを別に立てはしない。どんな遠方に居つて見えたないやうな場合でも、佛は自在神通の力を有つて居るから、困難に遭遇した場合には佛を憶念せよ、眼を閉むつて、我が師釋迦牟尼世尊と念ぜよ、我を念すれば、我は汝の前に常住する、我はこの通り何も畏れる所はない、偉大なる力を有つて居るぞといふことを、弟子共が傳道に出懸ける場合には何時も教へられて居るのである。お釋迦様を戴いて居りながら、事に臨んで恐れを懷くといふやうなものは、本當にお釋迦様を信じないものである。これは戦ひと言つても勿論道德的の戦ひを言ふので、善を行ひ、徳を積み、さうして社會に奮闘を續けて行く上に、釋尊を味方にして置きながら、尙ほ且つ頼り少く思ふやうではいかぬ。地獄へ行つても、お釋迦様さへ味方にして行くならば、青鬼も赤鬼も少しも恐れる所は無い。俺は釋迦如來を信じて居るところの佛教徒であるが、それに縄を打つことが出来るか」と言へばそれで宜いのである。日蓮聖人は常に弟子信者に教へられるのに「たとひ地獄に行つても日蓮が弟子檀那と名乗つて通らせたまふべし」と言はれて居るけれども、お釋迦様の信者と言つたならば、それより以上に尙ほ羽振がよく利く譯である。だから日蓮聖人やはりその事を言うて居るので、聖人が四條金吾に與へた御書に、四條金吾が若し地獄に行かれるならば日蓮は必ず同じ地獄に行く、さうすればお釋迦様があ見舞にお出でなされるだらう、日蓮も四條金吾も地獄に行つたといふのでは放つて置けない、釋尊自らお出ましになつたなら

ば、第一閻魔法王が冠を脱いでお出迎へに出なければならぬ、その時に赤鬼青鬼はどんな顔をして慌てふためくであらうといふことが書いてある。これは日蓮聖人はどういふ考で仰しやつたか知らぬけれども、モツと嚴肅なる意味に於て、佛教徒は佛の力といふものを確かに信じなければいかぬ。縊ひ閻魔法王の前行かうが、釋迦といふ名を言つたならば、閻魔法王と雖も、赤鬼青鬼と雖もビリツとするにきまつて居るのである。それは佛教に於て釋尊の威徳尊嚴といふものは實に天地に振うて居るものである。さういふ雄猛なる釋尊を信じなければいかぬ。即ち大雄猛世尊と申して居るのである。法華經の中にもその事は説いてある。お釋迦様は大雄猛、非常な強い方である。名前を言つたならば敵が標へ上る位の強さを有つて居る。

又佛の神通力といふことを言ふのも即ちそれである。法華經の涌出品の場合に、壽量品を説くことを如來師子奮迅の力を顯發せんと欲すといふことを仰せられた。壽量品は唯だ佛の慈悲、佛の實在といふことばかりではない、この師子奮迅の力を顯發して、釋迦如來が一たび吼ゆれば百獸恐れ戰くといふやうな絶大の威力を有つものが我が師釋迦如來で在らせられるといふことが壽量品の教である。天地宇宙の間に何のものも敵し得ない絶對無上の力を有つ本佛釋迦如來で在らせられるといふことを信じて、始めてその信仰といふものが力づき、又それが善を行ふところの力となるのである。故に日蓮聖人が實際に奮闘を續けられる時の力はそれである。お經の中にも法華經の勸持品には、佛

を念ふが故に忍ぶべしとあつて、三類の敵人が現はれる時にも、その他迫害に耐へる力は佛を念ふといふことである。即ち前の阿含に説かれて居る通りの事が説いてある。そこで日蓮聖人が一代の奮闘の上にも、その通りに現れて、頭の座に坐つた時も『慈父大覺世尊代はらせ給ふ』と申して釋尊を念ひ起して居られるし、或は佐渡の塙原三昧堂に於ても、一間四面の辻堂の隅に常に釋迦牟尼佛を安置して、この釋尊に朝夕奉侍して、さうして自分の勤行として居るのである。如何なる場合に於ても釋迦如來を呼ばねことは無い。愈々佐渡ヶ島に於て今度は生きて還れないナと思はれた時——一方では鎌倉幕府が如何に日蓮を還すまいと思つても日蓮は必ず生きて鎌倉に歸つて見せるとは言うて居られるけれども、又一方にはどうも危ぶない、今年今月萬が一も身命免れ難きかと思はれた時には「喜ばしいかな教主釋尊に侍り奉らんことよ」と言つて、直にお釋迦様の所に行けるのだといふ確信を有つて、即ち釋尊を力として日蓮聖人は一代の活動を爲されたのである。

斯様な意味に於て吾々が宗教的に救ひ護つて貰つて、さうして我が心の闇を照らし、苦しみを除き、罪を祓ひ、幸福なる善良なる生活をこの人生に現し、さうして一面には非常な善根功德を積み、一面には非常な智慧の光を與へられて、大事な事柄の筋道が立つて行くやうになり、佛は智慧の結晶であり、慈悲の結晶であり、力の結晶であるといふことを信じて、吾々の方にも慧心、信心、善心といふものがスッカリ貫いて、智慧の眼が覺めても南無釋迦牟尼佛、信心の眼が醒めても南無釋迦牟尼佛、道德の眼

が覺めても南無釋迦牟尼佛と唱へて、何處にも不足を感じない所に佛教の根本思想といふものはあるのである。そこには決して他のものを持つて来る必要はない、それが縦横無盡に働いて出る場合に、いろいろの説明となり、應用となつて七千餘卷の經典が賑つて居るだけのものであつて、その根本は釋尊の御心と吾々の心と、この二つの活躍する所に外ならないものである。それは今でも活きて居る。佛教といふものは到る處に活きて居る。お釋迦様の活きて居る御心が吾々の活きた信仰の心に結付いて活躍して居る所に、本當の佛教の信仰といふものは存して居るのである。その事を語り傳へたものがあつて居る。

信 仰 意 識

そこでさういふ佛様といふものは常住に在しますことを能く信じなければならぬのである、阿含には肉身滅すと雖も法身在ます。

と説いて、この人生に肉體を現されたお釋迦様は涅槃なされ、荼毘して御舍利となつてしまはれただけれども、その肉身ならざる法身の本體のお釋迦様は今も現に存して吾々を護り導いて下される、法華經にはその意味を明瞭にして、常住不滅の釋尊といふことを説かれたのが誣量品である。何時もお在でなさる、常住にお在でなされると説いてあるが、今活きて信心をする人の信仰の對手がその活きたお釋迦

様である。それはちょうどラヂオの電波が通つて来るやうに、こちらの器械が壊れないやうになつてさへ居れば、何時でも響いて來るのである。ラヂオの器械を据え付けて居る人が考へれば直ぐわかる。あの器械の一箇所の線をちょっと切れば直ぐ聞えなくなるけれども、線を繋げば又聞える如くに、お釋迦様は何時も何時も大慈大悲の非常な強烈な電波「吾々に注いで居られる」毎に自ら是の念を作す、何を以てか衆生をして」といふ大慈大悲の電力は、休みなく時間に關係無く吾々の上に注がれて居る、こちらが信仰の心を起してその電波の傳はるやうにちょっと器械を動かしさへすれば、直に感應道交して来る譯である。

その活ける佛と活ける我が信仰の精神交通をする、感應するといふ所に何時も心を置いて、道行く場合にも、ちょっと休んだ場合にも、今後の吾々の活きた信仰としては時と場所を限る必要はない。何處でも宜しい、顔を洗つた場合でも、汽車の窓からでも、菊を觀に行つてあり綺麗だなと思つた時でも、直にその感應といふことを想ひ起すといふやうに、折に觸れ時に方つてその精神を訓練して行く所に佛教の信仰といふものがあるのである。菊の花が美しかつたならば、その美しいに付けて佛様の有難さを感じる。人が優しく言うて呉れたら、斯ういふ人間ではもとの位言ふのだから、佛の優しさはモツと偉いものだなと考へて、これを有難く思ふ時にも、或は又嫌やな事があつても、その嫌な事に就て、人生だから斯ういふ事もあるけれども、佛様の前に出れば斯ういふやうな嫌な事を聞くこともモウ無いの

だと思つて悲しいにつけても、嬉しいにつけても佛を憶念して、その教説を信する所に、南無妙法蓮華經と唱へることになつて居るのである。それは何故唱へるかといふと、今申すやうな意味合が残らず書いてあるのが法華經であるが故に、法華經を通して信じて居れば、佛を忘れず、我が心得を忘れず、一切經の根本精神を握つて佛教を信心することが出来るから、南無妙法蓮華經と唱へるのである。法華經を忘れて低い所に行き居ると、信仰がバラ／＼になつて、横から又いろ／＼の事を言うて來ると狼狽へるやうになるから、私は法華經を通して釋尊を信じ、法華經を通して自分の信仰を定め、法華經の教に導かれてこの信仰を持続して居るといふので南無妙法蓮華經と唱へるのである。それは唯だ空虚な文字を信じて居るのでもなければ、言葉を信じて居るのでもない、譯わからずにやつて居るのでもない。法華經に説かれて居る今言ふやうな意味合、佛様に就ての意味合を信じて居ることを表白して、南無妙法蓮華經と申して居るのである。であるからお題目を唱へるといふことは、お題目とお釋迦様が衝つかつたり、邪魔になつたり、そんな事の決してあるべきものではない。それは日蓮聖人の御遺文にも明瞭に書かれて居る。これは善無畏三藏鉢に出て居る事であります。阿彌陀經を信ずるが故に阿彌陀様が有難くなり、大日經を信ずるが故に大日如來が有り難くなる。だから一切經といつても、お經の仰へ所が悪いと他に心が移つてしまふ。法華經を抑へて信心さへしたならば、お釋迦様の有難い主・師・親三徳の方ぢやといふことが、狼狽へる所なくわかるからして、法華經を通して釋迦牟尼を信じなければなら

ねと日蓮聖人は申して居るのである。法華經を信じて釋尊を忘れるとか、釋尊を邪魔にするとかいふ、そんな法華の信心の仕方があり得べきものではない。そんな事は學問をしない人がまで／＼餘計な事を言うて居るけれども、それは一部分の文字を捉へてまご付いて居るので、實に氣の毒なものである。そんな事は將來この法華經の研究、佛教の研究が進んで行けば、自然に消えてしまふものであるから、放つて置いても宜しい。彼等は皆煩瑣な紛糾した時代の學問の餘弊に陥つて居るものであつて、本當は佛の道を求めるものである。學問をあらわにして居るものゝ禪ひである。

或る人々は佛教を目して非國家的のものであるとか、或は厭世的のものであるとか、人倫を無視し道德を破壊するものゝ如くに云ふけれども、それは全く佛教を知らない盲目的批評であります。如何なる人が申しても、佛教に對してさういふ汚名を被せる人は、少しも佛教を知らない輩である。今日佛教が左様のものでないといふことを證明するには、幾等も明白な經典が存して居る。一體佛教は慈悲博愛の精神と、理想の國を思ふ精神とを結合させたものである。今自分等の言はんと欲する所の精神を教へたるものは佛教である。我々の學んで居る教の方から見ると、廣い博愛の大精神と形の國家とを調和させるものが佛教である。

——本多上人——

開目鈔講話

(第二十九講)

小林一郎

悪いの鑑別けの附かない者は已むを得ないけれどもマアしつかり考へて見れば解ることだらうと思ふ。斯ういふので、これから法華經の言葉を引かれるのであります。

法華經の第四寶塔品に云、爾時に多寶佛寶塔の中に於て半座を分ち、釋迦牟尼佛に與ふ

この間は、念佛・禪等が何故にこの法華經の弘まる道を妨げるものになるかといふ問題を持ち出しまして、それに對して日蓮上人は、自分で勝手にさう解釋する譯には行かないから、これはお經の本文を持ち出して、これに依つてその意味を明かにしようと。さうすれば所謂誘法といふ佛の正しい教に背くのがどんなに大きな罪であるかといふことが解るだらうと言つて居られます。勿論「生盲——生れながらの盲の者は力及ばず」盲といふのはつまり本當の分別の無い者でありますが、どんなに正しい道理を説いても、それがまるで解らぬやうな、物の善い

これは法華經のお話の時に申上げたやうに、お釋迦様が教をお説きになつて、そのお説きになることが一段終つた時に、多寶如來といふ佛様が新に現れ

て、そのお釋迦様と多寶如來とが一つの塔の中に並んでお坐りになつた。斯ういふことがあるのであります。これは

理智

の關係でありまして、一體一切の人を救ふといふはたらきは、これは智慧であります。智と言つても普通に「あの人は智慧がある」といふやうな、そんな簡単なものではないので、迷ひて居る者は救つてやる、又煩悶苦悶の多い者は正しい道に入れてやるといふやうなはたらきは、これはマア智慧のはたらきと言はなければならぬ譯でせう。ところがその智慧のはたらきといふものは何から出て来るか、ナニモ智慧といふものは一人で思ひ附いて捕へたものではないので、その智慧といふものは要するに正しい理です、道理です。道理が明かになつたのがそれが智慧であります。だからこれを『理智』と申し

ます。今は、はたらきの方から先に書いたから、智の方を初めに書きましたけれども、順序から言へば理智であります。理が明かになつて初めて智が明かになる。斯ういふ譯であります。でありますから、私がいろいろ信心をしたり、或はその他學問するに致しましても、これは決して自分一人のことを考へてやるのでなくて、大勢の人を救ひたい、又世の中の役に立ちたいといふ、所謂智を得たいと思つてすのだけれども、併し智を得るには理を明かにしてなければならぬ譯で、自分が力が無くて世の中を救はうとか、人を助けようといふことが出来る譯はありません。それから、どうしてもその智慧を磨かんとするには、理を明かにしなければならぬといふのは申すまでもないことであります。それから、私は自分が自分の修行をするといふことは、決して自分の爲ではないのであつて、自分が懈けて居つて人を教ふことは出来ない、自分が足らなくて人に勧め

たところが、それは幾ら言葉を巧みにしたところで人を動かすだけの力はない譯であります。さういふ點から言へば、理を明かにすることが即ち智を磨く本である、己れを完全にすることが即ち人を救ふ力の土臺だ。斯ういふことは申すまでもない話であります。

その事はお互ひが餘程しつかりと考へて行かないればならぬのであつて、世の爲め、人の爲と言ひながら、自分の修養を怠つて、自分の心が眞ツ暗闇では結局世の爲め人の爲にならずして終る譯であります。いつまでもさういふ風に吾々の心の中には、智を磨き、理を明かにしようといふ二つの心持が並んで相扶けて行かなければならぬ。これが今の大寶塔の中にお釋迦様と多寶佛とが二人お並びになつて居るといふ形で現れて居る。お釋迦様の方は智です。一切の人を救ふはたらきをなさる、世の中に出て、世の中の總ての迷つて居る者を救ひ、間違つて居る者に

正しい道を與へてやることであります。佛様のはたらきは一切の智慧から出る。だから佛様のことを『平等大慧』と言ふことが法華經の中にあります。平等なる大きな智慧、慧の字を書いてあります。これが、これは智といふことであります。平等といふのは一切の人を救ふこと、決して佛様は人間を區別して居らつしやらない、愚かな者は捨てるとか、悪人は見放すとかいふやうなことは決してないのであります。佛様はいつも平等であつて、どんな人間でもお救ひになる、そのお救ひになる根本が大慧であります。人間といふものは斯ういふものだ、世の中といふものは斯ういふものだといふことを能く見極めます。人間といふものは斯ういふものだ、世の中といふことを平等大慧と言ふ。お釋迦様は無論平等の大慧を具へて居る方に相違ないのであつて、佛のはたらきといふものはいろ／＼な形容があるけれども

要するに智慧である。斯う見て宜しい譯であります。

その佛様の仰しやつたことは無論間違ひのないことでありますから、誰でもこれに従つて行けば、だんだんに迷ひを離れて眞實の道が解るのでありますけれども、併ながら教を聞く者から言ふと、この教に依つて永遠に一切の人が救はれるかどうかといふことに就いてまだ疑ひがある。疑ひがあるといふのは、自分に智慧が無いからである。自分が本當に解つて居れば、お釋迦様のお言葉を伺つても、成程斯ういふ譯だと思つて、しつかり實行する氣になるだらうけれども、聞く方の人間に力が無いから、教を聞いても、果してこれが永遠に、何千年何萬年経つても變らない教であるかどうかといふことの見極めが附かない。そこで多寶如來が現れるといふことはイヤ、お釋迦様のお説きになつたことは、これは絕對の理だ、永遠に變らない道理だ、それは人間が人間である以上は、世の中の生活状態はどんなに變ら

うとも、人間の本性といふものは變る筈はないのだから、お釋迦様の仰しやつた教は、これは決して一時のものではない、永遠のものだ、これは絕對の道理ナンだから、世の中がどんなに變らうとも、人間の生活の様式がどんなに變らうとも、決してこれは變るべきものではないといふことを、人々に信じせしめなければならぬ。その爲に多寶如來が現れた、斯ういふ事實があるので、つまりお釋迦様のお説きになつた事は絕對の理だ、道理である、真理であるといふことを、人々をして信ぜしめなければならぬ。斯ういふ意味であります。

だから吾々はいつでもそこをしつかりと捉へなければならぬ。お釋迦様のお説きになつた事を今吾々が考へて見て、「成程此點だ」斯う思ふのは、これはマア誰でもある。能く考へて見れば、吾々の凡夫の心の迷ひをスッカリ明かにして、さうしてその迷ひを除くべき道をお教へになつて居らつしやるのだから

間の本性に叶ふのである。又天地萬物の本來の性質と一致して、さうして永遠に一切の人を救ふ力がその中から出て来るのだ。さう思はなければならぬ譯であります。

そこで釋迦・多寶の二人の佛様が、一つの塔の中に入並んで坐りになつたといふことがあります。さういふやうにお釋迦様の教が狂ひのないものだからといふことを確く信じて、そこで初めてこの教に絶對の信頼を捧げるといふことが出来る譯であります。それだからその爲に多寶如來がそこに現れて來るといふことを確く信じて、そこで初めてこの教に證據立てる、斯ういふことがお經の中には出て來るのであります。今吾々の眼の前に多寶如來が見えなくとも、吾々はこの道を信すれば宜しい。お釋迦様の仰しやつた事は、絶對の真理ナンだ、この絶對の理を覺つたのが佛であつて、その覺つた事とその通りにお説きになるのだから、それでこれが人

うとも、人間の本性といふものは變る筈はないのだから、お釋迦様の仰しやつた教は、これは決して一時のものではない、永遠のものだ、これは絶對の道理ナンだから、世の中がどんなに變らうとも、人間の生活の様式がどんなに變らうとも、決してこれは變るべきものではないといふことを、人々に信じせしめなければならぬ。その爲に多寶如來が現れた、斯ういふ事實があるので、つまりお釋迦様のお説きになつた事は絶對の理だ、道理である、真理であるといふことを、人々をして信ぜしめなければならぬ。斯ういふ意味であります。

だから吾々はいつでもそこをしつかりと捉へなければならぬ。お釋迦様のお説きになつた事を今吾々が考へて見て、「成程此點だ」斯う思ふのは、これはマア誰でもある。能く考へて見れば、吾々の凡夫の心の迷ひをスッカリ明かにして、さうしてその迷ひを除くべき道をお教へになつて居らつしやるのだから

来る譯でありませう。その事を今この寶塔品に言つてあります。

どうも世の中が復雜になつて參り、又總てが變つて參りますと、人間は兎角疑ひを懷くやうになりまして、今眞實だと言つて居る事でも、これから後になれば又違つて来るかも知れないといふやうなことを考へるやうになる。これは今のやうに世の中が始終變つて行くと、若い人などが兎角さうなるでせう。けれども人間といふものは、歴史有つて以來四千年以上經つけれども、やはり人間は人間ナンだ、三千年、四千年の昔に説かれた教を見て、も、今の吾吾にも全く適切な教であります。少しも變りはしないのであります。さういふやうなことを能く考へて佛の教といふものに、歸依する以上は、これは自達だけの歸依すべき教ではないのであって、人間である以上はこれに歸依すべきである。吾々の子々孫孫永くこの教に従つて教はれるのだ、斯ういふ風に

考へなければならぬ譯であります。その信仰を固める爲に、多寶如來といふ佛様が、釋迦牟尼佛の教が眞實だといふことを證據立てる爲に現れたといふことが、經典の中に書いてあるのであります。

爾時に大衆、二如來の七寶の塔の中の師子座上に在して、結跏趺坐し給を見奉る。誰か能此娑婆國土に於て、廣く妙法華經大音聲を以て普く四衆に告げたまはく、法華經を以て附屬して在こと有しめんと欲す等云云。第一の勅宣なり。

その時に大勢の者が、釋迦・多寶の二人の如來が七寶で飾つたところの塔の中の師子の座の上に結跏趺座し給ふ様子を見た。結跏趺座といふのは、身がチヤンときまつて少しも動かないやうな状態、佛は

モウ絶對の理を見極めて、御自分の心に一切の動搖がないから、そこで一切の人を教ふ力を具へて居らつしやる、その有様を相に現はされた、その様子を見奉つたのであります。

その時にお釋迦様が「大音聲を以て普く四衆に告げ言く」四衆といふのは其處に集つた總ての人といふやうな意味であります。一體は比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷を言ふのであります、斯ういふ場合には必しもさういふ者だけの意味でない、マア總ての人です。大體佛のお弟子なるものは、出家と在家と二種、又その中の男と女つまり四種きりないから、そこで「四衆に告げ言く」といふのは、其處に居る一切の人といふ意味であります。「誰か能く此娑婆國土に於て廣く妙法華經を説かん、今正しく是時なり」此處で説いた法華經の中に説き明かしたところのこの眞實の道を、後に至つて誰か此の娑婆に於て説く者はないだらうか。皆がそのつもりになら

なければいかぬぞ、斯う仰しやる。これを特に「娑婆國土に於て」と力強く言はれて居るのは、他の經には餘り類が無いのであります。これはいろ／＼經典を比べて讀んで見ると解るのであります。尊い教を世に弘めろといふやうなことを命ぜられた前例は幾らもありますが、特に「此の娑婆國土に於て」と斯う斷られた例は殆どないのであります。即ちこの法華經を中心とした思想が、娑婆即寂光土の思想であるといふことは、今まで屢々申上げたのであります。が、斯ういふやうな思想がこの言葉に能く表はれて居る。幾度も今まで申上げたやうに、經文といふものは前後の聯絡があるから、いきなり娑婆世界が、寂光土といふ佛の住んで居らつしやる淨土に變る、極樂淨土を西にも東にも求めるには及ばない、吾々の心の中が清淨になりさへすれば、こ

の土の上じのちが即すなはち淨土じょうどになるのだといふ、この思想を最も明かに表はされたものが法華經の神力品じんりきひんであります。神力品といふのはもうズツと末の方すゑであります。その神力品でいきなりさういふ事を言はれるのなくして、それよりズツと前の寶塔品ほうとうひんに於て、既に娑婆國土さばくにといふことを言はれて居る。皆にさういふ事を考へさせて置いて、それからだん／＼その話が進んで行つて、神力品に至つて「十方世界通じて一つになる」斯ういふことを言はれるのであります。だからお經を飛び／＼に讀んだのはお經の本當の意味は解らぬといふことを、私、幾度も申上げるのであります。それは斯ういふ所でも能く解るのであります。

この娑婆世界さばくせかいといふものは、今の所ではなか／＼暮しにくい場所ばうしょであります。幾度も申すやうに、娑婆といふのは勘忍かんにんをする、我慢わまんをするといふ意味であります。我慢をしなければ暮せないやうな世の

に取るから、斯ういふ言葉ごんばが能く解らないのであります。この『即』といふのは前に申したやうに『離れない』といふ意味であります。だからこの娑婆世界を離れないで極樂の淨土じょうどを求めようといふ、此處からやつて行つたら宜い。自分達の毎日の生活の中から、少しなりとも清淨な生活を此處に實現して、少しなりとも佛の心に近いやうな生活をして行けば宜いのである。ナニテ死んでから後の世の事ばかり考へるにも及ばなければ、この世よのを離れた西の世界や東の世界を考へるにも及ばない。さういふ意味で娑婆即寂光土さばくじきこうどといふことを申します。その娑婆即寂光土といふことが、それが大乘の佛教を通じての理想であります。この娑婆世界で説かなければならぬ、今娑婆國土は苦惱に堪へられない所のやうに思ふけれども、併しどんなに悪人あくじんでも、どんなに愚かな者ぐかんしゃでも、皆尊い佛性ぶつじやうを具へて居るのだから、修行

中である。併ながらこれは人の心こころが皆間違つて居るから、人の心こころが煩惱に満ちて居るから斯うなるのであります。煩惱の人ぼんのうじんと煩惱の人ぼんのうじんとが相對して、家をつくり、村をつくり、町をつくり國をつくつて居るからつても悔んで見ても仕方しむかたがない。銘々自分で自分の心こころを建直して行きさへすれば、一人が清淨な心持こころになつたら、それが一人では濟すこしまない、二人になり、三人になり、だん／＼にこの娑婆世界さばくせかいが所謂寂光土じきこうど、佛様の住むやうな世界せかいになつて行くといふことは、これは吾々が信じなければならぬ。併ながら『即』といふ字をいつでも『直ちに』とか『直ぐに』といふやうな意味に間違へて居るものだから、娑婆即寂光土といふのは嘘うそだと思はれる。即の字じを即時じじといふ意味に取るのは間違ひです。幾ら吾々が題目とくもくを唱へて法華經を讀んで、今直ぐ世よのの中は善くならない、だから即といふ字を即時、即座といふやうな意味

り騒ぎをやつて、人々が集まりさへすれば宜いと思つて居る。さういふもある。これは大して役に立ちませぬ、一時バツと榮えたやうでも又駄目になる。さういふのを見て、どうもあれは俗でいけない、お祭り騒ぎをして馬鹿々々しいといふので、イヤに神經質になつて相手を選んでばかり居る「こんな馬鹿な奴は連も駄目だ、斯ういふ奴に言うても連も役に立たない」斯ういふやうに非常に神經質になつて選んでばかり居ると、結局その教といふものは弘まらない。これは中道を得なければならぬ、まん中所で行かなければならぬ。あまりお祭り騒ぎばかりしてはいけない。さればと言つて神經質になつて、たゞ志を同じうする者はばかり相手にするといふやうなことをやつて居れば、結局駄目になる。自分と志を同じうする者は自分一人だけになつてしまふ、これは仕方がない。そこで廣く説く、決して一時の効果を急ぐ譯ではないが、善人惡人の區別をそんなに事な事であります。

そこで「誰か能く此娑婆國土に於て廣く妙法華經を説かん」皆その決心をすべきである。今正しく是時なり。今お前達が皆その決心をして行かなければならぬ時である。何故ならば「如來久しからずして當に涅槃に入るべし」モウこの世に出て永い間教を説いて、説くべきことは一通り説いてしまつたのだから、久しからずしてこの世を捨て、皆に別れて去らうと思ふ。併ながら自分の無き後に於て「此妙法華經を」法華經の中に説いて居るところの此の教固執しないで、悪人でも憎まない、勝れて居る者と愚かな者の區別はそんなにやかましく言はない、愚かな者でも蔑まないやうな心持、さういふ心持で教を説く、無論説くといふことは弘めることでありまして、口で説くばかりが説くのではない、身で以て手本を示しても宜しい譯であります。が、さういふやうな心持を有つて行きまることは、これは随分大事な事であります。

それを「附屬して在ること有しめんと欲す」誰か他の者にこれを委嘱して、さうして自分の後に出了た者に依つて、この教が普く世の中に弘まり、一切の人々を救ひ得るやうになりたいと思つて居る。だからこの佛の心持をこの世に受け継いで、この教を弘めるといふ決心をすべきである。斯ういふことを仰しやつた。

これが「第一の勅宣なり」この前にも申したやうに、都合五たび繰返して斯ういふことを仰しやつて是非とも末の世に於て法華經が弘まるやうにといふことを言はれたのであります。その第一の仰せは斯ういふ風に仰しやつた。

それから第二にはどういふ風に仰しやつたかといふと、同じく寶塔品の中に「爾の時に世尊重て此義を宣べんと欲して偈を説いて宣く」前に仰しやつた意味を更に偈の言葉に依つて説いて居らつしやる、「聖主世尊久く減度し給ふと睡も、寶塔の中に在して向法の爲に來り給へり。諸人云何ぞ勤めて法

又云く、爾時に世尊重て此義を宣べんと欲して、偈を説いて宣く、聖主世尊久く減度し給ふと雖も、寶塔の中に在して尙法の爲に來り給へり。諸人云何ぞ勤めて法

言はれた 聖主世尊といふのは佛様のことを言ふのでありますけれども「聖」といふのは迷ひを離れた意味、主といふのは一切の人を教へ導く力を具へた意味、結局聖主世尊といふのは佛様のことです。どの佛様のことも聖主世尊と申して宜しいのでありますが、併しこの場合にはお釋迦様が多寶如來のこととを仰しやつた。この多寶如來といふ佛様が此處へ態々現れて来て、さうして皆の爲に斯ういふ風に、釋迦牟尼佛の言つた事は違はないぞといふ證人に立ちになつたといふことは、これはどうかしてこの教が永く世の中に傳れば宜いといふ、その慈悲の心持から出られた、洵に尊いことである。この佛様は「久しう滅度し給ふ」モウ永い以前に説くべき事だけは説いて、世を教へ導く爲に力を盡しになつた。さうして時期が来て世の中を去つてしまはれた方であるのだけれども、併しそれでも末の世の者のことを御心配になつて、今寶塔の中に入つて「法の

爲に」即ちこの法華經が末の世に弘まる力にならうと思つて此處へ來られたのである。だからこの佛様の如き大慈悲の心持に感激するならば、大勢の人々も勤めて法の爲に力を盡さなければならぬと思ふ。心持が起きなければならぬ、恩に報いようといふ心持が起きなければならぬ、恩に報いようといふ心持が起きたならば、佛の恩に報いる爲には、佛様のお喜びになる事をするより外に、佛の恩に報いる方法はないのである。佛のお喜びになる事はどういふことかといふと、一切の人間を救ふといふことより外ない。だから佛の教を世の中に弘めることに力を盡すのが、これが佛の恩に報いるたゞ一つの道だ。他の方法はない。だからこの佛様のお心持が有難いと思ふならば、人間は何としても勤めて法の爲に力を盡すより外ないではないか、といふことを言はれた。

又「我分身の無量の諸佛、お釋迦様の身が十方の世界に現れている／＼な佛に成つたといふことを、法華經の中に屢々言つてあるのです。さういふ佛様が恒河の沙の數ほど大勢あるのだが、それが此處へ来て、さうして「法を聽かんと欲す」お釋迦様が法を説きになることを一緒に聽いて、さうして皆の者を獎勵する爲に此處へ集つて來られた。それは「各妙なる士及び弟子衆、天人龍神」諸の供養の事を捨て、法をして久く住せしめんが故に、此に來至し給へり。この佛様といふのは、吾々の住んで居るこの娑婆世界でない、他の世界に居られるので、他の世界は洵に安樂で、この娑婆世界のやうなものではない、安樂な土ナシだから、其處に居さえすれば何でもないのだ、少しあ苦勞は無い、洵に安樂な平和な所だ。それだからさういふ他の世界に居らつしやるならば、態々こんな世界に現れて行らつしやらなくても宜しいのだ。それで「妙なる士」洵

に平和な良い所であつて、其處には大勢の弟子も居り、又天上界の者、人間界の者、龍神といふやうな者も多勢居て、さうしてその佛に供養して佛に仕へて居るのだから、其處に居らつしやりさへすれば、この娑婆世界などへ態々行らつしやらなくても宜しいのであるのに、たゞ娑婆世界にこの法華經が永く榮へるやうになりたいといふことを考へて居られる爲に、その安樂の所を捨て、態々この苦勞の多い娑婆世界に集つて來て、さうしてお釋迦様の教の眞實であるといふことの證人に立ちになつた。洵にこれも慈悲の力の廣大なものと言はなければならぬ。

佛の慈悲といふものが最もこゝに力説されて居ります。お釋迦様が一切の衆生を吾が子と見て、これを教はうと思つて世の中にあ出になつただけではないであつて、多寶如來も、この娑婆世界の者が永く法華經を信するやうにといふ心持で出て來、十方

の世界の佛様も、そのそれ／＼の世界に居れば安樂であるのに、熊々この娑婆世界にやつて来てお釋迦様の教の證人に立たれる。佛といふものはこれほど慈悲の深いものである。その佛の慈悲に感激するならば、この娑婆世界の者が一生懸命になつて、この尊い教を自らも信じ、又世の中に弘めることに力を盡さなければならぬではないか。斯ういふことになつて來るのであります。

吾々はどうしてもこの恩に感するといふ心持を有たなければならぬ。又恩に感するならば、恩に報ずるといふ心持になつて來る譯であります。さうしてそこから一切の善い行ひが出て來るのであつて、この事をこゝに能く言つて居られるのであります。

さういふ風に佛の慈悲心といふものが廣大なものであるから、その佛の慈悲心の廣大なことに感することになりますと、誰もこの尊い教に背かうといふ心持は起きない。又この尊い教を世に弘めることに

に無くならないやうに、廢れないやうに、能くこれを護つて行く者があるか、どうぞそのつもりになつて呉れ。又教を世の中に弘めるには自分の修行が大事だ、だから讀誦して、繰返し／＼讀んで、自分の修行を勵んで行くといふことをしなければいけない。

これはチョット考へると、逆に言ひさうな所でありますまして、「讀誦し護持せん」と言ひたい所であります。普通の考から言へば、自分で修行して、それから、この世の中に弘めて、これが滅びないやうにする。斯ういふのがマア常識で言ふと順序であります。だから讀誦し護持せんと言ふべきであります。

が、併ながら本當に修行するのに、護持しようといふ心持がないと、本當の修行は出來ない。それは大事です。自分一人の事を考へたのでは本當の修行は出來ない。自分一人といふものは小さいものであります。自分の事は自分で勝手にやつて宜いのであり

まして、モウ嫌になれば止してしまつても誰も文句を言はない。だから自分の事だけ考へたのでは、自分の本當の修行は出來ない。自分一人がしつかりすれば大勢の人が救はれる、自分一人がぐづ／＼して居れば大勢の人が救はれないであるから護持して一切の人を救はうといふこの心持があつて、そこで讀誦する、お經を繰返し讀んで自分の修行を勵むといふ、この力が緊張して來るのであります。だからここで讀誦し護持せんと書かないで、護持し讀誦せんといふ風に書いたのは非常に深い意味がある。これは法華經の中に始終言つてある、一切の人の爲に修行するのだ。一切の人を救ひたいと思ふから、その一切の人を救ふところの大いなる力を具へる爲に自分は修行するのだ。斯ういふことが屢々言つてあるのであります。さういふ意味でこゝを讀むと大變に意味が深いのであります。我が滅度の後、末の世に至つて誰かこの經を護持し讀誦する者があるか

力を寄しむといふ考にはならぬのでありますから、チョウド大きな風がサツと空を吹いて來ると、小さい樹の枝が自然にそれに靡くやうに、この佛の教といふものは自然々々に人の心に深く入つて、皆これに感動して、皆これを護るやうになつて來る。慈悲の力といふものほど廣大なものはないのであります。「大風の小樹の枝を吹くが如く、此の方便を以て法をして久しく住せしむ」——『此の方便』といふことは、教を弘める爲に力を盡されたお釋迦様がいろ／＼教をお説きになり、多寶如來がこれは眞實だと言つて證人に立ちなり、又十方の世界の佛様がその證人に此處へ來られた、斯ういふやうな種種様々な方法を以て、さうして「法をして久しく住せしむ」この法華經の中に説かれた事が永く世の中に榮えて行くやうに、力を盡されるのである。斯ういふ譯だから、「諸の大衆に告ぐ、我が滅度の後、誰か能く此の經を護持し讀誦せん」この教を世の中

近詠數首

大八木義雄

慈悲

おほれたる人に佛は垂るるなり

救のつな強きあはれみ。

世の中の人を教はうと思へ、又教よのは自分の力を養はなければならぬから、本當にこの法華經を修行しなければならぬ。『今佛前に於て自ら誓言を説け』此處で一つ自分の前で、必ず自分達は末の世に至つて再び現れてこの教を信じませう。又この教を世の中に弘めませうといふところの誓ひを立てよ、斯う仰しやつた。これが『第二の風詔也』風詔といふのは天子の詔といふ意味でありますがつまり佛様は諸經の王と言ひますから、佛様の仰せを風詔と申します。

(次續)

報

人のため盡くす誠にむくいをは

求むる心持たずもあらなむ。

三國干涉

ありと有る備かためて戰はむ
われに仇なふ國は増すとも

前月號頁數の正誤表
二二六五八七誤
〇九八七六五正
三三三三三三一誤
四三六五〇九正
三三三三三三二誤
六五四三二正

青少年學徒に賜はりたる 勅語を拜して

河合陟明

昭和十四年五月二十二日朝 予は連日の日課たる佛教思想大系の組織に向つて、思索を凝らし、朝食の間もなほ屢々ベンを走らせ、食後再びまた瞑想に耽つてゐた。……

果然、瞑目沈思の耳孕に聞え來つたのは、嘲鳴たる君ヶ代の響きである。予は直ちに起つて、スイツチをひねつた。ラヂオより聞え来る響聲をさしくかねて知る。軍事教練第十五週年に際し、全國學生生徒に對する天皇陛下御親閱の放送である。予はラヂオの前に端坐して貫き見るが如く、ラヂオを見守り聞いた。

未曾有の盛事 未曾有の感激 學徒が長くも陛下の御親閱を忝うするのである。あゝ軍國の學徒の光榮……予も曾ては學徒であつた、而て今尚ほ學徒である、たゞ學園を出で、社會の一角に立てるまでである。予等が曾て辿り來り、通過し來りしその學窓にあり學途に立てる學徒が、今軍國の春宵もまた、陛下の御親閱を忝うしつゝあるのである。……

予はラヂオの一語一句を貪るが如くに聞いた。一語も聞き洩らすまい。身その場に在ると同じき見ることを全く聞くことに集中した、全身耳となりつ

、その情景を眼前に展開した。壯觀極りなかるべき その光景……

陛下宮城御車寄を御發 この報一たび式場に轟く
や 全部隊 三十個大隊 百十個中隊 三萬二千五百
百餘名の 全教官學徒は 一齊に 拔刀着剣 士氣

凜然として 若翠映ゆる大内山の宮城二重橋前廣場の 式場に漲りわたる……

燃たる天皇旗のもと 陛下は陸軍様式御軍装に
大勳位副章を御佩用 御愛馬白雪に召させられ
軍戶山學校軍樂隊の 君ヶ代吹奏裡に 式場に臨御
いよ／＼玉座に着かせたまうた

この時 荒木文相は 静々と御前に參進 御親閲
を仰ぎ奉る旨を奏上し終るや、總指揮官中山少將の
指揮刀一閃 涌き起る軍樂隊の勇壯なる行進曲と共に
に 大分行進は いよ／＼開始された 先頭はま
づ 小原大佐の率ゐる 第一集團 大學部隊であ
る、御親閲受章を竿頭高く掲げた 荣光一段と輝
く枝旗が朝陽に照り映えつゝ 陛下の御前にさしか
かるや 一齊にこの枝旗を垂れて 敦禮をなしつゝ
(宛も聯隊旗等と同じく) 繼く學徒の幾十百千が銃

劍を閃かせつゝ 「頭右」の軍隊式敬禮のまゝ 隊伍
整然 歩武堂々として 行進 繼けてゆく 見よ
その五月 緑葉薰風にはためく枝旗 陽光に輝く劍
光芒影 聞けその玉砂利ふみしめる力強き靴音うち
響くところ……

玉座の御左に侍した文相は その都度 各學校種
別を奏上 あだかも觀兵式と全く同様である
陛下には畏くも一々これに舉手の禮を以て應へたま
ひつゝ 玉座に立御……

アナウンサーの聲が聞え来る毎に サツとして電
流の如くに感激が予の全身を走る……
この未曾有の盛儀に參加したる 學生生徒 日本
全國 内地 臺灣 北海道 朝鮮はもとより 遠く
満洲 北支 南洋等に至るまで 陛下の御稟威の及
ぶところ 日本帝國の版圖に屬するところの 率士
の濱 王臣に非るなき 津々浦々の大學より中學
に至る 全學生生徒が 悉く舉つて この盛事に參
加し來つたのである その服装も 或は紫紺あり
霜降あり 詰襟あり 背廣あり そのゲートルも
或はボタン式もあり 卷ゲートルもあり その色も

再び囁嘆たる 君ヶ代吹奏裡に 陛下は式場を發
御 愛馬に召させられつゝ 静々として 宮城へ
還幸あらせられたのである。

あゝ 予は予等の學生時代の軍事教練の實狀を回
顧し それと對比し その學徒の精神的內面の驚く
べき推移變遷を洞察し 翁來十有五年の今日 内に
はこの盛儀あり 外には皇道の聖戰あり 忠勇の武
人と 軍國の學生と……而てこれら青年學徒がやが
てまたまさに 國運恢弘 大陸經綸に勇躍すべき
アジャ將來の光明まさに今陽光に薰るさつき(五
月)の如くなるを思ひ 感慨極まらなし。

而て予の盡すところは何ぞ! 法界無上の大法を
提げて この皇國に この天皇のみ國に このすめ
らみくにに 而てこのすめらみくにを通じて 全世
界人類に 否 全法界に 貢獻するにあり焉矣
然 陛下は文相を宮中に召させたまひ 優渥なる勅
語を 特に青少年學徒に對して 下し賜つたので
ある。

縁もあり 黒もあり 等々 千姿萬態であるが、掲
ぐるところの枝旗 擧ふところの銃劍 眉宇に漲る
士魂には 齊しくいづれ劣らぬ 大君の御標となる
べき 軍國學徒の大精神を輝かしてゐる

折から 十時二十分 三機編隊よりなる 學生航
空聯盟十二機は 蔽々たる爆音を轟かせつゝ飛來
大空よりこの大分行進に參加し、かくて十有五年間
練武の成果は 四十分間に亘つて 繪卷の如くに展
開され、最後に商船學校生徒三百餘名の一團をし
んがりとして この大分行進は終了したのである

分列式終るや 文相は再び 鞠躬如として御前に
參進し 謹んで

天皇陛下萬歳を唱へ奉つた、予も直ちに 宮城の方を向いて起立し 式場にもとけとばかり 双手を挙げて これに相和した、而て三唱の後 その振り上げた手を 直ちに合掌し 一聲高らかに
南無妙法蓮華經 とお題目を唱へた その最後の聲 最後經の一語の餘韻は 予は感極まつて嗚咽し 泣いて叫び 天地に震ふた……

いふまでもない。

新聞紙の報ずるところによれば、

畏くも戰時下 青少年學徒に對し 優詔を賜は
つた教育界では、擧げて聖慮の深厚なるに 恐懼
感激してゐるが、廿三日文部省で開かれた 全國
直轄學校長會議には、各校長共交々立つて感激を
述べ、誓つて聖慮に副ひ奉らん事を期し、いまだ
ない嚴肅な空氣の中に終了した。

抑も 教育 教化の任にあるものに對し 帝國軍
人に對し 全國民に對して 勅語を賜つたことは
屢々 聽らぬところである。しかしながら 苛くも學
生生徒そのものに對して 即ち學窓にありて孜々と
して勉學しつゝある學徒に對して 特に 優渥なる
勅語を下し賜つたことは これ實に未曾有の事であ
る 而て今回の勅語が たゞに學徒に對してのみな
らず その教職にある教育者に對し 又その父兄に
對し 即ち全國民に對して賜つたものであることは

抑も 教育 教化の任にあるものに對し 帝國軍
人に對し 全國民に對して 勅語を賜つたことは
屢々 聽らぬところである。しかしながら 苛くも學
生生徒そのものに對して 即ち學窓にありて孜々と
して勉學しつゝある學徒に對して 特に 優渥なる
勅語を下し賜つたことは これ實に未曾有の事であ
る 而て今回の勅語が たゞに學徒に對してのみな
らず その教職にある教育者に對し 又その父兄に
對し 即ち全國民に對して賜つたものであることは

なつた（下略）

この感激 この覺悟は もとより當然のことであ
らう、而てその若き學徒の永久記念としての具體的
方策たるや果して如何……

學徒 教職員 父兄等 乃至 全國民に賜りたる
優詔 然り而て實に 予みづから 曾ての學徒 今
なほ學徒 然り 社會的學徒 社會的學究の一員に
あるものとして 國民教化の職責を有する 宗教家
の一隅に位するものとして この度びの優詔に對し
ては、まことに感激の深きものがある

予は 予も曾て 國家の恩惠 即ち 陞下の恩惠
によつて 凤に 國家の學府に學び、國家最高の學
府に 人類思想の最高たる 哲學及び宗教の高峰を
人類頭腦と心情の最も偉大なる產物たる 思想的ア
ルプスの連嶺を 或は瞻望し 或は登攀し來りたる
ものとして、而て今は崇高莊嚴なる學の高嶺に報
るらるゝところ多かるべき 純潔にして多難なる登
攀を 繼けつゝあるものとして、予は この度びの
學徒に下し賜りたる優詔を拜して 深き々々感激を
禁じ能はざるものである。而てその間に推移變遷し

來つた學界の趨勢、否 學界をも動かしたる國情の
釐くべき變遷に對して、特に一段と 歴史哲學的洞
察の眼底に 感慨深からざるを得ぬものがある

三

つら／＼我國思想界における 今日に來たるまで
の趨勢を大觀するに、いはゆる 學の權威と國家の
權威と 文化の理想と國家の理想と、然り 國體の
尊嚴 皇運扶翼に對する 學問の尊嚴 文化的權威
の、この兩者が、曾ては分離し 今や漸く結合せん
とするに至つた、否 實に結合するに至つた
從來 學問の自由 學園の自治 といふことが
學界のモットーであつた

滿洲事變を契機として 漸く目覺め來つた日本精
神の高潮は 激昂として 學園をも襲ひ 學界に押
し寄せた。憂國の志士 具眼達識の士より 凤に唱
道せられたる 國家革新的一大源泉としての 大學
教育の改革に對し、他面いはゆる自由主義者輩より
して 喧々囂々として 「大學の顛落」 なるものが
叫ばるゝに至つた。

もとより文化なるものは 國境を超越して 世界

性を有するともいはれるであらう、それは總ての人類普遍し乃至は歴史を一貫して妥當性を保持するとも考へられるであらう。しかしながら文化の普遍性は内に國家的特殊化を含まねばならぬ。特に國家組織の理想的形態としてのいはゆる完全國家に於ては、あらゆる領域における文化の統一人間生活の全き統一が見出されねばならぬ。プラトニが善のイデアを以て實在の最高にして最も最も具體的なるものとし、而てこれを現實界に於ては國家型態の内に實現しようとしたことは、深き意味あることである。國家と遊離した學問の自由があるか、學園の自治があるか、學の殿堂に立て籠つた文化の權威が國家統治の經緯と逆流する如きものであつては、斷じてならぬ。

一面に於て文化が國家的特殊として具體的に形成せられねばならぬと同時に、しかしながら他面に於て國家は大なる目的を有せねばならぬ。偉大にして崇高なる目的を有せねばならぬ、國家はまさしく世界性を包有せねばならぬ、人類普遍共通の而てまた最高の大理想を有せねばならぬ、國家の

理想が全人類に安住の地を與へ正義と福祉を齎すものでなければならぬ、國家的世紀主義ともいふべき高き理想を有し、しかのみならず歴史の事實於てまさしくこれを實現してゆかねばならぬ。實現してゐるものでなければならぬ。苟くも國家が沒理想の國家無目的の國家然り人類全體の正義と福祉に逆行し背反する如きものであつては、断じてならぬ。地球上の土地と物資と人類とを獨占し搾取し酷使してその民族と文化、その人種と文明を奴隸化し乃至うち滅、多數の人間の幸福を蹂躪してしかもその上に一部少數の人間が低級なる人類固有の煩惱的欲望を恣にするといふ如きことがあつては、断じてならぬ。それは大自然の意志大宇宙の意志宇宙生命の根本意志が決してこれを許さないであらう。

かくの如き人類共通の大理想を有する崇高なる國家と、國家的現實性に積極的具體化する文化の歴史的社會的形成と、かくの如き二面の統一の絶好典型を我々は實に天業恢弘八紘一宇といふ我が大日本肇國の大理想に、その三千年歴史の實績

に、その特に昭和現代の國運發展と國策經營に見出すことができるのではないか。

かくの如き國體擁護のためまさしく學の權威ではないか、かくの如き皇運扶翼のためまさしき學問の尊嚴ではないか、曾て呼ばれた「大學の顯落」それは學問と國家との分離より結合への過渡的產物であつたことを今に於て物語る。道義建國天業恢弘のかくの如き大理想を外にしていづこにいはゆる文化の理想いはゆる學の權威はたまた教育の理想なるものが存するのであるか。國本ニ培ヒ國力ヲ養ヒ以テ國家隆昌ノ氣運ヲ永世ニ維持セムトスル任タル極メテ重ク道タル甚ダ遠シ

人心を一時に鼓舞するものは政治なり

綱紀を萬世に維持するものは名教なり

幕末水戸學派の尊皇論者會澤正志齋の説は至言といふべきである。而てかくの如き皇基を國體を永世に維持する名教をそもそも何物に求めんとするか。

日本精神日本文明は今や決して單に神儒

佛三道のみではない。日本は久しく東洋文明の寶庫であつたが、明治開國以來、泰西の文化は澎湃として押し寄せた。今日西洋文明は社會の各層に平たる地盤を獲得してゐる、特にいはゆる知識階級に於て然りである。かの文化の中には功利主義、自由主義、マルキシズム、唯物史觀乃至機關説等の如き我が國體と根本的に相容れざる毒物も混入してゐるが、他面精神文化の上に於てもまた高價なる文化財を含蓄してゐるのである。かくの如き古往今來東西文化の融合統一こそ我國將來の一大使命である。しかもその中心を明示するに當つては吾人は巍然として大聖釋尊の名教本佛實在の宗教的大理想を以てする！これが人類世界の將來に於て歴史に君臨すべき文明の王者である。

こゝに於てか八紘一宇といふ世界大の國家的理想と東西文化融合の大理想との、即ち國家と文化との究極的開顯統一の根本形式が實に萬古の達人たる我が日蓮聖人によつて七百年の昔夙に唱道せられたる立正安國であり法國冥合で

あり その具體的實現が 戒壇國立であるのである。

而てこの戒壇の本質たる 本門の大本尊とは 實に 四海一家 神人同歸なる 人類普遍にして最高の大理想ではないか、その實現の曉こそ 人類の歴史の意義の完成である、人類歴史の意義の 人類的完成である 地上的完成である。

更に進んで その人間不滅の生命の 無限向上による 大自覺位に到達したる 佛陀的完成 超越的完成は、これ たゞに人類の目的たるのみならず 宇宙一切の生類の進化の目的 宇宙生命的の目的 宇宙の大精神的生命の絶對目的である。これ人類にとりては その歴史の意義の 法界的絶對の完成である、むしろ 法界歴史の完成ともいひ得るであらう。十界皆成と

本佛常住と

この二個の大真理 この永劫の福音が こゝに大光明を放つに至るのである。

翻つて 今日皇道宣揚の聖戰は、かくの如き 歷史の意義を完成すべき 大日本といふ一國家の本質に具有する 汎世界的理想實現の世界史的序幕で

事實 即ち是れである。

四

静かに反省すれば、今日は實に 曾て無かりし二個の顯著なる事實が 我が國家社會の表に現出し來つた。それは一面に於て——今までの我が國家非常時にも 見ることを得ざりし——實社會の物質的動力たる 經濟界も 斷然 國家と歩調を一にせざるべからざる實狀となれると同時に、今一面に於ては、社會の思想的動力たる 學界 思想界特にいはゆる學者グループそのものまでもが、國家的權威のもとに 國體明徵運動のもとに 總動員させらるゝに至つたこと 即ちこれである。かくて文教の府よりして唱へ出さるゝに至つた 日本諸學振興委員會の設立 その研究發表 及び 公開講演會の如きは その一例である。東洋にせよ西洋にせよ 精神文化にせよ 物質文化にせよ 一切の文化乃至 いはゆる外來文化を 我が日本國體本來の眞意義に照して 振興策勵し 組織構成せ

ある。

これを古に満つては、天孫降臨 神武肇國は たゞに我が大日本のみならず 實に全世界に對する『歴史的一大革新』であつた。

これを今に鑑みては、昭和今日の聖戰は 神武東征 美々津の御船出の再臨であるのである。天の沼矛を以てしての 曾ての大八洲のみならず 更に大いに躍進發展して、今やまづアジア大陸に對して修業固成の大業を成せんとしつゝあるのである。

歴史の過去は過去に非ず、現在が過去を拉し来て過去なく、過去が現在を包み去つて現在なし、過去と現在が共に同一の發足點に立つ、然り時の大元を超えて 現在が直ちに久遠の太古に接續し 神國肇造の根源に參割する。しかも三千年歴史の實績は 烛として祖國認識の眼底に映じ來たる……

而て更にこれを將來的大理想として断するときは、

本佛感應の靈力を體現し、國祖神明の天佑を保全して 萬世一系の寶祚を賜みたまへる 我大日本帝國天皇の 轉輪聖王四海統治の 莊嚴なる豫言的大

んといふ 學的進路の開拓であるのである。

學の目的たる 文化的理想が 國家の大使命と根本的調和を要請せられ、後者のために 前者積年の弊害が 徹底的に革新されんとしてゐるのである。 多年學園の空氣を呼吸し來りし……

予は 予等の學生時代、マルキシズム華やかなりし時代にして 大學を始めとする 數多の學徒がその境外を乗り越えて 實踐に暗躍したりし 而て予の母校たる京大は、その最先端であつたのであるが、その十有餘年に亘る 當時を回顧し、爾來十數年に亘る 特に最近數年における 祖國日本の國情の驚くべき變遷には、まことに感慨極まりなきものがある。

而て 社會思潮 否 單なる社會思潮ではない、國家そのものを 維持し 擁護し 發展興隆せしむべき 一國社會思潮なるものゝ、唯物史觀より 日本精神自覺への變遷は、大いに慶すべきであることもより言を俟たぬが、他面に於て 予は 慄然たらざるを得ぬものがある。

きこと 昨起今倒甚しき變化の跡に鑑るとき
人心惟れ危く 道心惟れ微なり
國民の心の 賴みがたなきこと 即ちこれである。

斯道の先覺者が、而てまた 予みづからも亦當時より夙に唱へたりし 神武肇國の大理想云々は、當時は 學徒よりも 社會よりも 笑はれたものである。今日は如何 讀者諸子 今日は如何！ 實に思ひ半ばに過ぐるものなき能はず……あゝ……

日本國民の 祖國認識 祖國の自覺、日本民族の國家的および實に世界的大理想と使命の自覺、そもそもこれを實したものとは、何物であつたか『敵國外患無きときは 國必ず殆し』それは武人であつた、外國防の第一線に 身を挺して國家を守る軍人であつた。しかも 内に國家を守るべき 思想界と經濟界 物心二面は、猶ほも未だ 世紀末的自由主義の腐敗と亂脈を呈し、特に學界 いはゆるインテリは その反國家的思想の集窟であつたのである。宜なる哉 かゝる學園の空氣を呼吸して集立した

る 爲政者なるもの、政治 外交 内外すべての經論は 悉く 内に憂國の志士の憤激を買ひ 外に國威を失墜するの 結果のみを齎した。しかも猶ほ國家の大勢は朝野昏々として眠つてゐたのである。國家革新が 思想言論の上ののみにては 到底實現されさうもない。

かくてこゝに 勃然として 而も陸續として 萬策盡きたる 血盟團 五・一五 二・二六 等々の事件が突發し、一身を抛てゝ祖國に殉せんとしたる彼等護國の志士によつて 血を以て 國家革新 國家肅正が購はるゝに至つた。否それも未だ十全ではない、しかしながら その革新の氣運が 漸く緒に就かんとするに至つた時、

俄然 東亞の風雲 支那事變を惹起し、こゝに 國民生活 國民思想の 全分野に亘つて三千年傳統の民族的自覺 祖國日本への日本精神への自覺 日本精神の本質たる世界的理想と使命への大自覺が はしなくも全國民の上に喚起せしめるるゝに至つたのである。

かくて外に 大君の御権となれる忠勇なる武人が

アジア大陸の酷寒炎熱に 勇戰奮闘しつゝあるの時、内 國民生活の物的基礎たる經濟界も 國家への奉仕の大目的に向つて 大轉回を受ける 否 大轉回せざるを得ざるに立ち至り、又更に 國民生活の最も根本的な 精神的基礎たる 思想界 學界そのものも亦 國家的大理想に 遠元し 反省し自覺せしめらるゝに至つたのである。

而て 國民精神陶冶の大本が 教育に存することいふまでもなく、かくてこゝに 國民精神の根柢を培ふべき 國民義務教育の任に從事せる 全國小學校教員のために さきに一度び 陛下御親閱の事あり、今又更に 全國學生生徒に對しても 亦實に御親閱の榮を賜ひ あまつさへ この學生生徒に對して まことに天恩優渥 慎き詔勅を 下し賜るに至り、その學徒として 國民として 一貫不動 萬代不易の大覺悟と進路を 親しく垂示せさせたまふに至つたのである。

予が 母校京大に學んだ時 今上陛下が なほ攝政宮として 行啓あらせられ 全教授學生が謹んで奉迎送申し上げたことであつた、宛も 予の入學の

年 その春夏の交 開校紀念日の事であつたのである。しかもこの京大は さきにも言へる如く、その翌年の頃既に その學生が身學徒の立場にありながら マルキシズム實踐の 火蓋を切つて 全國學徒に魁したところであつた 予は當時 この學園の學徒として 深き慚愧と懺悔を感じると同時に、この彼等の舉に對して 實に苦々しく 國民的憤激の血を湧かしたものであつた 否一般に 學生の態度そのものが 低級であり、三大節に際する 御真影奉拜に對しても 登校せず 國家國體に無關心なるを以て 却つて自ら高しとなし 或は街の中をブランチするを以て得意としたる 不心得者が多かつたのである。その軍事教練も 實にだらしのない 到底語るに堪へざるものであつた 時代の影響を受けて 軍事教官にも權威が認められず 又教官みづからも不見識のものが多かつたのである 予はこれら的一切に對し 當時既に 痛憤を禁じ得なかつたものである。

しかるにその後十數年 國民的自覺の怒濤激流は叱咤するが如く あらゆる學園を襲うた 反國家的

一切の分子を 粉碎し洗滌せざるは止まざるの慨を以て……

時運の變遷といふべきか 否 御稟威の然らしむるところといふべきか 然り 國體靈力の發現するところであるか 予は感懷極りなし……

而て 軍事教練十有五年の今日 あゝ實に 世紀の嵐 世紀の巨歩 人類歴史は一大轉回し その地圖は塗り換へられつゝある今日 つひに 我が内外多難の國情を背景にしつゝ 全國學生生徒に對して畏くも軍教練武の 御親閱を受くるまでに立ち至つたのである。教育界 學界 また實に 大いなる轉回をなしつゝあるではないか しかもそれが軍教十五週年といふに至つて 一段と意義が深いことを予は思ふ。

何となれば 今日まで 文は武を尚ぶに非ずして却つて實に 武を輕んじ 武を賤み 學生として武徳を練るを 迷惑がつたものである。軍教實施の當時は それについて世上囂々の論難があり、衷心これを悦ぶ教授及び學徒は 寂々として静かつたのである。武は文と相並んで 大いなる徳の一半たること

とを全く忘却し 人生必須の備へたることを 全く無視し、しかもそのいはゆる文化 いはゆる學問の趣くところ 反國家的 反國體的ゆきしき思想をも 所在瀕々として惹起するに至らしめ、國內は思想的に恐るべき 所謂『自界叛逆』赤化の嵐吹き荒び、しかもそのマルキシズム 唯物史觀は いはゆるインテリの間に 社會常識として あのづから承認肯定せらるゝの勢を馴致し、諸般の情勢は彼此相俟つて 國民精神剛健の氣風なるものは 地を拂つて空しく 國運の前途はまさに暗澹として聞く爲政者それ自身すらまた 國家的大自覺 肇國の大理想なるものにすこぶる聞く 内外共に 國威失墜 国運壅塞の方向に ひた走つてゐたのである。あゝ危い哉汲々乎たり 國民人心のいかに頼みがたなきことであるか！

翻つて見よ、讀者諸子 今日は如何 今日日本の國情は如何？

而て 明日の日本の使命は如何？ 最近十數年に亘る 我が國家民心の 驚くべき推移變遷に省みなば 將來とても 決して油斷はでき

ないことである。然り 断じて油斷と墮落と馳緩と頹廢は、嚴にこれを諒めねばならぬ。それは國民を驅つて 光榮なる祖國の大使命を 忘失放拋せしめ たゞ衰運敗殘の一運を 辿らしむるのみではないか！ 歴史は繰り返す／＼ 吾人は断じて 再び過去のにがき經驗を嘗めざらんことを欲する！

あゝ 萬世を貫いて 常に國民を陶冶し 人心を教化すべき 天地間至大至剛の 一大明教を 予は欲する 國家は欲する 人類の文明と歴史は欲する！

常恒不斷に 繼れ新たなるべき 皇國物心一如の國家改造と アジア經緯の世界史的進軍 この内外兩面に亘る 帝國の經綸は、實にかくの如き 一大明教 一大正法を確立して 以て 文武一元の大理想を 具現するところに存するのである。然り―― 天孫降臨 神武東征 以來 皇國一貫の皇謨 大化改新にも 建武中興にも 明治維新にも 昭和今日の聖戰にも 皇國一貫の 文武一元的大理想に則つて 據つて以て始めて詫く その理想の遂行を期待するを得るに至るであらう。

こゝに於て 謹んで拜するに
國本ニ培ヒ國力ヲ養ヒ以テ國家隆昌ノ氣運ヲ永世ニ維持セムトスル任タル極メテ重ク道タル甚ダ遠シ而シテ其ノ任實ニ繫リテ汝等青少年學徒ノ雙肩ニ在リ汝等其レ氣節ヲ尚ビ
より以下

文ヲ修メ武ヲ練リ質實剛健ノ氣風ヲ振勵シ
までの十有七段の御教示 而て最後に
以テ負荷ノ大任ヲ全クセムコトヲ期セヨ
との結びの鳳詔 言々句々 一はこの裡に 過去學徒を風靡せし 積年の流弊を 儼然として指摘誠告あらせらるゝこと ひし／＼と生等の胸にこたむると共に、一は昭々として 今日以後の 我が皇國學徒たるものゝ 然り 陛下の忠良なる 天業恢弘の翼賛の民として 國家の中堅たり 國運を雙肩に荷ふべき大使命を有しつゝ 學にいそしむものに對し 一貫不動 不易の覺悟を まことに懇切に慈教垂訓せさせたまうてゐるのである。

不敏なる生等の 久しく痛感し 體驗し 憂へ來りしところのものが、今 天子の勅として紫雲の上

より出で しかも畏くも 生等學徒に 直接下し賜るに至る。

まことに 聖慮宏大 聖恩無窮 生等感激惲く能はず……

謹んで 聖旨を奉戴して 宵禁を安んじ奉らんことを 周する次第である。

不肖陟明 曾て 國家の恩惠 即ち

陛下の恩恵によつて 國家の學府に學び 今 精神的護國 思想興國 然り 信仰報國 立正安國の使命に奮勵しつゝある身として この勅語を拜して感泣し 敢て辭を列ねて 奉公の赤誠を 表白致す所以である。

南無妙法蓮華經

昭和十四年五月二十二日 學徒御親閲 勅語下
賜の佳莢 及び二十三四日に亘り 帝都 天恩

舍に於て 皇居へ遙拜し 虔んで記す

豫告

孟蘭盆會

日時 七月十六日(日曜)午後二時

場所 本部 講堂

法要後時局に即せる講話會開催の豫定に付御誘合せ御參詣相成度候

磯 部 滿 事

財團法人 統一團

延山紀行

日蓮聖人、弘安五年晚秋、波木井抄に『縱ひいづくにて死に候とも、九箇年の間心安く法華經を讀誦し奉り候山なれば、墓をば身延山にしてさせ給へ、未來際までも心は身延山に住むべく候』と仰せられて、身延の御草庵は、僅か三間四雨十二本の柱を以て一ヶ月足らずで急造された極めて粗末の草堂らしかつたが、而かも實は終日一乘妙典の御法が論談され、夜は徹して要文誦持の御聲に、かの天台山や、靈鷲山にも異ならざる有趣い靈山であつた事が想到される。

一體大聖人の身延御入山に就ては、或る人は遁世の様に思つたり、或は悲觀的な批判をするけれど、大聖人御自身に遺された重要御書中には次のやうなことが記されてゐる。

五月十二日鎌倉をいでて此山に入れり、これは偏に父母の恩、師匠の恩、三寶の恩、國恩を報ぜんがために身をやぶり命を捨てども、破れざればさてこそ候へ、又賢人の習ひ三度國をいさむるに用ひすば山林にまじわれといふことは定まれる例なり。
(報恩抄、一四九九)

又、

國恩を報せんがために三度までは諫曉すべし、用ひすば山林に身を隱さんと思し也。又上古の本文にも三度のいきめ用ひすば去れといふ、本文に任せて且らく山中に隠り入りぬ。
(下山抄、一五七九)

此外御撰舞抄や、光日房抄、妙法尼抄等を拜すれば、大聖人御入山のお心持ちは明瞭である。即ち信行と報恩と私

共への御爲めであつた。

然るに聖滅後、正應元年十月第七回忌に際して、延山隨一大檀那波木井公と、六上足白蓮阿闍梨日興師との間に意見の衝突を來たし、上野時光は憤然として日興師を伴なつて離山され、守塔輪次の廢絶、富士一門の分立となつたのである。

精師家中抄上に、

日興ハ波木井ノ誇法改マルベカラズト思召シケレバ、
誇法ノ地ニハ居ル可ラズトテ出デ給フ。板御本尊、生
御影、其外御書物、御骨等マデ取り具シテ離山シ給
フ。若シ我慢偏執ノ者ドモ押ヘ取ル事モヤト若キ弟子
衆、檀那少々相加ヘリ守護シテ身延ノ山下ヨリ下山通
リ大井マテ立退キ給ヘリ。波木井ノ人々驚テ先づ使者
ヲ以テ遣往ヲ懸望セリ。比ハ正應元年霜月初ノ事ナル
ニ、使者往復八箇度ナリ。(此狀共テ懸望狀ト云フナリ、
其狀、今重須ト西山トニアルリ)

彼等は身延を誇法の山とし、人々の信教を止め、參詣を禁止して、延山には最早大聖人の御魂も在さず、御真骨もま

しまさず拔歎の魔境だと叫び續けて居る。我が顯本法華に於ても、そのことは屢々聞されたものであつたが、時代の推移と共に見解の上にも若干相違を生じ、往々本多貌下が天晴會員と共に御草庵に詣で、足袋はだしで寶塔の御前に進まれ、肅然として拜跪合掌された眞摯の態度に、全山盡く様を直し、熱涙禁じ得なかつたといふことは有名の語り草である。

ある人々の間には信仰は實在意識が最も大事である。木畫の形像といふものは實體でない、今日佛教信者の中には形像崇拜者も多分に在るが、夫等は教理を知らぬ俗信輩なんであると、父母師匠のお墓詣りもせないことを誇り頗に悟つた積りで居るけれど、却てそれは非宗教の態度ではあるまい。日蓮聖人が『墓をば身延山に立てさせ給へ、未來際までも心は身延山に住むべく候』と仰せられ、又老の身に五十丁の坂を攀ぢ登つて故郷の空を慕はれた處に尊いものゝあることを拜する。

昭和十四年五月下旬、統一團同心會から次の身延詣案内が發せられた。要點を摘出すると、

第一班

六月三日 午後三時十五分 東京驛發、米原行準急行に

乗車。

同五時五十八分 富士驛着、身延線に乘換。

同 六時五分 同 発。

同 七時卅一分 身延驛着。

同驛前より乗合バスにて身延町久遠寺山門前下

下車徒步にて競功着、同所に宿泊。

四日 午前六時 御草庵跡にて修法、直ちに

思親閣に向ひ出發。

同 十時 思親閣にて一同勸行後少憩
下山。

午後一時 競功にて晝食。

同二時四十八分 身延驛發。

同四時十二分 甲府驛着、中央線に乘換。

同四時四十分 同發。

同八時五分 新宿驛着、解散。

第二班

費用概算

第一班參加者 金七圓六拾參錢也。

第二班參加者 金六圓五拾錢也。

第一班參加者は朝食用意のこと。

當日第一班は十餘名・大部分は第二班で合計七十餘名。列車は東京驛始發からモ一席磨なく超滿員、五時間立ち續けの人達も多かつた。第二班の富士驛で、福岡宣善班長の令兄も特別參加された。一同は元氣旺盛で満面喜色に溢れて居る。新緑の燃ゆる身延のその昔はどうであつたらうか。

此山の體たらくは、西は七面の山、東は天子の嶽、北は身延の山、南は鷹取の山、四の山高きこと天に付きさがしきこと飛鳥もとびがたし。中に四の河あり、所謂富士河、早河、大白河、身延河也。其中に一町ばかり間の候に庭室を結びて候。晝は日を見ず、夜は月を拜せず、冬は雪深く、夏は草茂り、問ふ人希なれば道を踏みわくること難し。

(御振舞抄、一四一三)

かゝる不便な深山、大聖人は佐渡よりお歸りになつた翌聖月、五月十二日鎌倉を御發足、同夜は酒匂に、十三日足柄峠を越て竹の下に、十四日貴瀬川に沿ふて車返し、今の沼津に、十五日浮島ヶ原より大宮着、十六日南部内房に、十七日富士川に沿ふて身延へと實に六日がゝりで入山されたが、今は文化の恩惠に、たとへ不眠不休でも僅か數時間で東京から來られることは何としても有難い。

五月十二日鎌倉を立ちて甲斐の國へ分け入る、路次のいぶせき、峰に登れば日月をいたぐが如し、谷に下れば穴に入るが如し。河猛くして船渡らず、大石流れて箭をつくが如し。道は狭くして繩の如し、草木繁り

て路見えず。かゝる所へ尋ね入る事淺からざる宿習也。かゝる道なれども、釋迦佛は手をひき、帝釋は馬となり、梵王は身に立ちそひ、日月は眼に入りかはらせ給ふ故にや、同十七日、甲斐の國波木井の郷へ著きぬ。波木井殿に對面有しかば大に悦び、今生は實長が身に及ばん程はみづぎ奉るべし、後生をば聖人助け給へと契りし事はただごとも覚えず、偏に慈父悲母の波木井殿の身に入りかはり日蓮をば哀み給ふ歟。其後身延山へ分け入つて山中に居し、法華經を晝夜讀誦し奉り候へば、三世の諸佛、十方の諸佛菩薩も此砌に在すらん。釋迦佛は靈山に居して八箇年法華經を説き給ふ、日蓮は身延山に居して九箇年の讀誦也。傳教大師は比叡山に居して三十餘年の法華經の行者也、然りと雖も彼山は渴れる山也、我此山は天竺の靈山にも勝れ日域の比叡山にも勝れたり。然れば吹く風もゆるぐ、木草も流るる水の音までも此山には妙法の五字を唱へずと云ふことなし。日蓮が弟子檀那等は、此山を本として參るべし、此則ち聖山の契也。(波木井抄、二二一二)

波木井殿と御對面遙ばしたといふ發軾堂遙島は、地門の「開會關」と日潮師の雄渾な筆勢の巨額を仰ぎ見て直ぐ左にある小高い所で、その前方に御腰掛石といふものがある。お堂の「發軾」といふ額の二字は、水戸の徳川綱條公の書だといふことである。時間の關係上バスの中からチラとかいま見た丈けで、山門前迄飛ばした。

第二班組は車中で朝食を済ませて、山門から直接御草庵跡へ詣る豫定であつたが、列車混雑の爲めそれが叶はずして兎も角籠坊で開闢、夫れから住職丸山師の懇意な歓待を受け、御草庵跡と御廟所に案内され、甘露の涙に咽びつゝ法味を捧げ、法話、記念撮影を卒へて、いざ思親閣へ登攀となり、統一團同心會員三十餘名は妹尾部隊長指揮の下に、山下氏旗となつて日の丸國旗を先頭に、次に大鼓組それから會員、續いて婦人の一群を入れ、その後へ酒悦立正青年團員三十餘名は朝日部隊長指揮して、岡本氏旗手、日の丸國旗と次に大鼓組、團員の順序で二列編成の長蛇の陣で武歩堂々と、急がず、休まず、飲まず、整然として大鼓に和して唱題を續けつゝ進軍を始めた、時に六時四十

分。大衆中には十代の少年もあれば、六十を越えた老年もあり、肥大的猛者もあれば、瘦弱の如きもあつて、色とりどりの國民軍である。服装は國服もあれば、背廣もありモーニングもあれば、和服もあつて千差萬別だが、お互の心は純一無雜、南無妙法蓮華經の五字七字に悉く皆統一されて居るから、一步は一步より健實に、一音は一音より力強く、祖師の御跡を慕つて唐々と進んだ。山崎林丘に老鶴の和唱も嬉しく、中途の千本杉は景勝全山屈指であり。聞く處に依ると雪の深い地方では、杉ばかりを植えると必ず雪に折られるから、一本置きに松を植えるのとの事であるが、此所は實に美事に幾百の古杉が絶然天空に聳立して日光を覆ひ、君子的崇高の感を與へられる。實に目に爛れるもの、耳に聞ゆるもの成く教でないものはない、法悅に浴しつゝ歩む足は軽い、八時四十五分、早くも思親閣育恩堂の聖地に達した。

いふ迄もなく此所思親閣は文字の示す通り、大聖人が至孝の大本を身を以て示教された人倫道義の顯現所である。明治大帝の幼學綱要に於ても開卷第一に孝行を擧げて、

天地ノ間、父母無キノ人無シ。其初メ胎ヲ受ケテ生誕

スルヨリ、成長ノ後ニ至リ其恩愛教養ノ深キ父母ニ若

ク者莫シ。能ク其恩ヲ思ヒ、其身ヲ慎ミ、其力ヲ竭シ

テ以テ之ニ事ヘ、其愛敬ヲ盡スハ子タルノ道ナリ。故

ニ孝行ヲ以テ人倫ノ最大義トス。

と示され、論語には、

其ノ人ト爲リ孝弟ニシテ上ヲ犯スコトヲ好ム者ハ鮮シ矣、上ヲ犯スコトヲ好マズシテ亂ヲ作スコトヲ好ム者ハ、未ダ之レ有ラザルナリ。君子ハ本ヲ務ム、本立テ道生ズ、孝弟ハ其レ仁ヲ爲スノ本ナリ。

とあり、孝經には、

人ノ行ハ孝ヨリ大ナルハ莫シ。

日蓮聖人は更に竿頭一步を進めて、

外典三千餘卷佗事なし、ただ父母の孝養計りなり、爾れども現世を養ひて後世を齋けず、父母の恩の重き事は大海の如し、現世を齋ひ後生を齋けざれば一清のごとし。内典五千餘卷佗事なし、たゞ孝養の功德を説けるなり、爾れども如來四十餘年の説教は、孝養に似た

寛に三思三省すべき聖訓である。

深草の元政上人が、萬治二年、卅七歳の時、御母君の願から共に身延へ詣でられ、去年の暮に逝かれた慈父の遺骨を背にして、八十に一つ足らぬ慈母の手を探つて、八月の月中旬に京の庵を出て、月末に奥院へ参つてその遺骨を收め且つ御自身のそり髪も埋められた。

いたづらに身をばやぶらで法のため

わが黒髪を捨てしうれしさ

投身湯鑊^一拯^二群毛^一 終向^二雲山深處逃
宗祖九年猶忍苦 吾儕一日豈群勞
若研^一蒼海^二記^三鴻業^一 欲^二齋^三須彌^一彌^二毫^一

別有^一風教可^二追慕^一 聖^二靈^一父母^一陟^二斯高^一

『蛇は自ら蛇を知る』元政上人御自身が孝養の志厚い性情から、大聖人の至孝に感激せられて有名な「身延行記」の一章を贈された。この埋髪塔に笠の様になつた古櫻が、今さはしく榮えてゐる。孝子にあやかりたいものと二三記念の撮影されたこともうれしい。

祖師堂の門前に、日蓮聖人お手植の杉といふ亭々たる老杉が左右にある。これはその昔大聖人六十の高齢、御所勞隣にも拘らず、五十丁の道なき山をわけ登り、遙か彼方の空を眺めて故郷を偲び、御兩親のお墓への御手向けとして植ゑさせられたといふことである。宗教情操のない人から見れば、なにも慈々此の險難の山坂を登らないでも、何處でも實在意識で父母の御向向は出來ない筈はない、時間の節約からいつてもあまり感心した事ではないではなかと、

勿論御草庵に在つても、本化如來使たる大聖人の懇ろな法華經の同向供養が、御兩親の精に結構感應道交疑ひはなしにも拘らず、かゝるお手本を示されたといふにはより以上深い意義があらねばなるまい。

『父母の家を出て出家の身となるは、必ず父母をすくはんが爲なり』と開目抄に仰せられ、弟子信者でも父母孝養の事を申せば『涙更に留まらず』と説かれ、故郷の人から生苔を送れば『片海市河小湊の磯の邊りにて音見しあまのりなり、色・形・味もかはらざるが、など我父母替らせ給ひけんと、かたちがへなるうらめしさに涙も持へ難し』と泣かれた。世間の人は『子を持つて知る親の恩』といつて自ら體験せねば、親の苦勞も有難味も眞に會得されない。親は十人の子をば養へども、子は一人の母を養ふこととなし』洵に淺間しいが、大聖人は子供の體験はない、體験はなくとも日本第一の智者であり、三世を貫いての知見は、神通不可思議の道力あつて、自らその神境自在であることを憶ふ。その大聖人が老の勞も、病の苦も忘れて、父母を

れども、その説いまだ顯はれず、孝が中の不孝なり。

(上野抄、一九四四)

墓はるゝこと嬰兒の様に、遙か故郷の空を遠望しては心ゆくまでに讀誦題回向して薰孝の一分を滿足させられた法華開闢の根本孝こそ、現代特に有難い無二の御教である。「親は自分を生んでくれた、一人前にしてくれたから、それで恩返しに孝行せねばならぬ」といふ様な理論は、日蓮聖人の孝道ではない、親達はいかに焦燒醜陋であつても、我親を親とせよと微子はいつた。自分を怨み鞭つ父でも絶對服従で仕へる人こそ、日本人なんである。釋尊御在世の時大飢饉があつた、一人の佛弟子が袈裟を賣つてそのお金をして釋尊に供養せんとした處が、釋尊はこれは尊いお金を自分が納むべきではない、寧ろお前のお母さんに供養せよと仰せられた。そこでお弟子は佛様は此の三界第一特尊のお方であります、我母は無智なる事は牛羊にも劣つてゐますからと申上げた時に、お禪迦様は、お前の身は誰れが生んだのちや、速かにお母さんを供養せよ、と教へられたのであつた。それが佛教なんである。いろ／＼理窟を捏ね廻してゐる間は未だ至誠の發露せない状態ではあるまいか、法華經の事の一念、事の三千とは此の思親開の靈境に

立つた時、秘々と味識さるゝであらう。一同は謹んで御堂前に整列し、至信に住してお自我偈一週と、數十遍の唱題と御遺文を念誦し奉り、大眾讀拜の芳蹟を偲んだ。至誠の凝結せる讀誦の梵音、渾身の躍動せる大鼓の浮響は、遠く遙く遙かの房州に流れたであらう。椎名氏の俳句も感極つて出ない程、一同の信感は高調して居た。南無妙法蓮華經。かゝ所だからなか／＼去り難く、二時間を過して漸く十分半、再び隊伍を整へ、來る時と同様の編隊で徐行した。降りは登りよりも足を痛め易いものだから、一層自重しつづ高らかに唱題に和して足並を揃へ悠々と下山した。正午少し過ぎ本院に着く。一人の落伍もなく、大鼓の威力を充分に發揮した。

身延祖山の諸堂は、日蓮聖人御在世に僅か數年の御草庵から、數年後十間四面に改修され、夫より第三世進上時代には諸堂整備されたけれど、西谷は土地狭隘なところから第十一代日朝師時代に斷然現在の地に移つて、大に堂塔伽藍、造営に努めた。延山開闢より當に二百二年、併し永年之間には度々火難で、堂宇の興廢あつたが、明治八年一

月の大火災には殆んど重な建物を焼き拂つた、殊に恐懼に堪えないのは、開目抄、種種御振舞抄、諫曉八幡抄、法蓮抄、守護國家論、新禧抄、顯佛未來記等々の大切な御書が失はれたことは千歳の恨事である。昔は八幡大菩薩、鎌倉の詩法を厭はれ、宮殿を焼盡して天上されたとか。今大聖人は無道念の者を反省懺悔せしむべく、天火を下されたのであるまい。其後數年ならずして日満師、鼠山感應寺の殘材を以て再建されたといふ。自分は輪奐の美を誇る寺門よりも、身延河に沿ふた深敬病院にこそ活きた妙法華經の血が流れて居ると合掌せずに居れな。立派な堂塔や美事な校舎が建築されても、人格者が出て来ない、僅か七疊半か八疊の一室に廿人も難居して、而かもその中から國家を背負つて立つ人の出た松下村塾を想ひ、爰に久遠寺と深敬病院の上に一種の感應を儲すのである。

時間の關係もあるので、祖師堂前に一同整列し恭しく唱題を捧げてから、麓坊に引揚げ晝食を戴いた。早くせないとバスが發車するからと急がせられるまゝに、午後二時この坊にお別れしたが、御禮の印にまと玉杵三岳氏の國體篇

朗吟、西谷の木靈に響ひて清韻遠く及び、大聖人も定めし善哉、善哉と喜されたかの心地がして主客滿悦、書きぬ名残を留めて急速度に町へと行進、豫定通りの甲府廻り新宿へと向つた、幸なる哉である、歡ばしい哉である。晚八時過、事なく新宿驛歸着、萬歳三唱と唱題を高らかに和して後散會。

末代漢世の詩法闡提五逆たる僧も俗も尼も女も此經にて佛に成らん事疑ひ無し、然ば法華經第七に云く、我滅度の後に於て應に此經を受持すべし、是の人佛道に於て決定して疑有ること無し云云。此文こそよによに憑しく候へ。此等をさまざま思ひつづけて觀念の牀の上に夢を結へば、妻戀鹿の昔に目をさまし、我身の内に三跡即一心三觀の月暉り無く澄けるを、無明深重の雲引覆つ昔より今に至るまで生死の九界に輪廻する事、此砌にしられつつ、自らかくぞ思ひつづけける。

立わたる身のうき雲も晴ぬべし
たえの御法の鷺の山風

寸感片々

笹木欣爾

一、佛道としての題目

それは、單なる茶の湯には非ずして、須く茶道であらねばならない。

それは、單なる生け花には非ずして、須く花道であらねばならない。

それは、單なる歌作りには非ずして、須く歌道であらねばならない。

それは、單なる筆運びには非ずして、須く書道であらねばならない。

それは、單なる茶の湯作法を外にして、別に茶道があるわけでもない。茶の湯作法即ち茶道なのである。

花を生けることを外にして、別に花道があるわけでもない。生け花即ち花道なのである。

歌を作ることを外にして、別に歌道があるわけでもな

ばならない。

だが——である。茶の湯作法を外にして、別に茶道があるわけでもない。茶の湯作法即ち茶道なのである。

い。歌作り即歌道なのである。
筆を運ぶことを外にして、別に書道があるのでない。運筆即書道なのである。
提、それは、單なる佛教に非ずして、須く佛道であらねばならない。佛陀の説き給ひし教が、道として我々に受け入れられる時、我々は初めて法悦を實感することが可能である。だが、その佛道も、佛陀の教説を外にして、別にあるわけでもない。佛教即佛道なのである。
そして我々は、佛教としての題目を、又、佛道としての題目を、知り且つ唱へるべきなのである。

二、大中孝師のことども

本紙の五月號にのつてゐた「徳川光園卿の信仰」なる記事中に、大中孝師の一文が引用されてゐるのを見て、私は非常に嬉しく思つたことである。それに、あの記事を讀ん

だのと前後して、かねてたのんで置いた千葉のK君から、大中孝師親筆の本尊を感じたのであつた。孝師についてこと云ひたくなつた次第である。

大中孝師、即ち大日院日孝上人は、該記事にもあつたやうに、小澤誕生寺を再興せる人で、宗門に於いては餘りにも名高い。その行業記（水雲集掲載）によると次の如き人となりであつて、私の憧憬してやまぬ高僧の一人なのである。

……祖母、常ニ法華ヲ持ス。師（日孝上人）側ヲ難レズ。耳濡ノ力、自然ニ十如是、壽量音門等ノ諸品ヲ詣語ス。風習ノ逐フ所ロ、早ク世相を厭ヒ、九歳琢上人ノ室ニ投ズ。九歳ニシテ稚染シ、已ニ妙典ニ通ジ、遂ヒニ沙彌ト爲ル。……天資淳厚ニシテ、秀氣雰然タリ。……辨山ニ登リ（元政上人ニ）北面叩問シテ側ラニ侍スル事七年。才氣超逸ニ、詩筆雄麗ニシテ、ク希美譽ヲ得タリ。……光圓卿、久昌雄利ヲ鼎建シテ、盛ニニ眞乘ヲ護ス。師（日孝上人）ノ風ヲ聞ヒテ、介ヲ馳セ、之ヲ招ヒテ、首座位ニ充ウ。禮遇最モ渥シ。……寶永戊子ノ年十月十六日、遽カニ病ニ臥ス。日ヲ追テ重シ。自ラ起タザルヲ知テ、唱題ノ外、他事ナシ。十八日未ノ時、泊然トシテ化ス。世壽六十有七、僧臘五十又八。……既、少シトキ

勝手に鉢を入れた上に（點線ある所）、至つて短文ではある

ニ接シテ億マズ。他に於テハ甚ダ莊カニ、自ニ處シテハ

至ソテ約ナリ。……

が、これだけでも、大中孝師と、深草の元政上人や水戸光園卿やの關係がほど明かとなるし、更にその天性や高徳のほども、大體に偲び得るのである。上人の詩文集たる水雲集一巻の中には、元政上人や光園卿關係の詩文が相當にあつて、その中にはこゝへ掲げて見たい佳什もあるのだが、紙數等の干係で到底出來ないので残念である。佛者としての上人の高徳を慕ふに足りる詩だけは、ほんの二三をこの項の終りに出しておくことにする。

たゞ、上人に於いて、これだけは何をおいても言ひ落せない。即ち「宗旨漢語」のことなのである。上人は、祖書の一闇浮揚に廣く流布せんことを願はれて、その中の肝要八部を選んで漢譯をせられた「宗旨漢語」とはこれなのである。全部では相當大部の著作で、和刻本の「別頭統紀」には、全部收めてある。八部の遺文とは次の如きである。

一、開目鈔

二、撰時鈔

三、法華取要鈔

四、觀心本尊鈔

五、本門戒體鈔

六、法華題目鈔

七、四信五品錄

八、教機時國錄

いま、何かの参考までに、開目録三大誓願の個處だけを抄記して見よう。

假使天神捨國留難逼身我今畢命爲期。身子之退
大行難堪乞眼故久遠大通之徒歷三五塵點遇
惡智識故於善於惡捨法華經是墮獄業也。設有
人言捨法華經且就觀經修之其爾讓國復明責言
不念彌陀殺害父母如是留難忽然發起我不爲智
者見敗壞卒不可從其余障難輕於風塵我日本國
家者我爲柱礎人者我爲眼目水者我爲舟楫如是
悲國卒不可退。

御遺文の漢語譯、祖書の一闋浮提黃宣流布。私は、上人の氣宇をたまへたい。上人の學識をたまへたい。上人の卓見をたまへたい。

こゝに更に、上人の詩二三を水雲集から抜き書きして、上人の學德を追憶するのとしたい。

地接招提隣鹿群
共僧禮佛觀空法
爲客烹茶說古人

山居
坐しては山を見
臥しては水を聞く
山水の間
只此の如し

山 水
坐見山
臥聞水
山水間
只如此

前にも書いたやうに、大中孝師は深草の元政上人に師事した人で、孝師の名が出れば、これに續いて是非、元政上人の名も亦出てこなければならない。見出しの文句は、實に元政上人のそれで、上人の詩文集たる井山集にあるのである。

三、坐見山臥聞水

林下生涯似葉一
有時戲伴稚童去
夜雨
抱疾不聞一卷書
夜來和雨唱三種要
唱題
今古人情爭有空
經王六萬九千字
悟入首題一句中

夢中世事淡於雲
不覺松柏桂夕噓

具さには右の如くである。何んとよい文句ではないか。何んと含蓄のある言葉ではないか。幾度もく、静かに口づますには居られないものである。漢字にして僅かに十二字、どれも抜き差しならぬ文字達である。皆ビツタリと坐つてゐる「坐しては山を見臥しては水を聞く山水の間只此の如し」と。無限の餘情を感じずには居られないである。字數は至つて少い。内容は全く平凡である。が、少ないが故に餘韻がこもり、平凡なるが故に味ひ切れぬ味があるのであらう。

元政上人は、山水の間に處しては、山を見、水を聞き、たゞ此の如きのみであつたのである。餘りに平凡すぎるやうではあらうも、山水の間にあつては、正にかくあるべきなのであらう。山を見、水を聞き、たゞそれだけである。若し少しでもそれ等以外のものを求めるなら、山水の間より外の所へ行く外はないのである。山水の間にあつては、どこまでも、山を見、水を聞くのみなのである。

私は、この短い言葉の内に、限りない味ひを見出す。と共に、また非常に教へられるのである。山水の間にあつては、山を見、水を聞くばかりであるとするなら、人生の間にあつては、人間の間にあつては……など考へ續けて見るのである。私は「山水の間」なる文字を「人生の間」と

か「人間の間」とかと置き替えて、そして前にある六字をどう代へたらよいものだらうかと、色々に頭をひねつて見るのである。山水の間にあつては、その山水を見聞する計りであると云ふ。人間の間に處しては、矢張りたゞ一箇の人間として生きるべきなのであらう。私ふうに云へば、「行くも人間住も人間人間の間只此の如し」とでも申さうか。人間が人間として生きるとは、これ以上當り前で、これ以上眞實に契つたことはあるまい。

だが、人間は人間であれかしとは、煩惱の動くまゝに手にもおへぬ俗情生活を營むと云ふことでは、断じてない。却つて、或る程の戒律の實踐を必要とするのである。戒律を守つて、本來の人間の姿に還らねばならない。自體戒と姿にあるなら、戒などは要りもせぬのである。煩惱が強くて人間たることから滑り落ちるので、その本へ還るために戒なのである。煩惱具足が人間界への約束ことならば、戒律の實踐も亦人間界の約束ごとでなければならぬ。人間が人間に還るための戒律となれば、別に不思議なことでもなければ、面倒なものでもないではないか。人間は人間であれかしと云へば、こゝに當然佛性の開顯などと云ふ問題も出て来ねばならない。でも、話が理窟めかしくなる前

に、私は筆を止める事にする。味ひの深い、暗示に富んだ上人の言葉を傳へ得ればよいのである。この十二字は、自然を鑑賞する言葉であらうが、我々が求道し、修養する上にも、充分に役立つ文句であるのである。

因に、これに類した短い言葉は、漢籍の中にも出て居て、人の心をうつるのである。しかし私は、元政上人の風格を背景とし、元政上人の言葉として見る處に、ありがたさをシミトと覚える者なのである。

四、蓮月尼の心境

宗教の説く處は概念ではない。思想でもない。眼に見て木の葉が青かつたり、鼻にかいで花がほつたりするのと同じく、現前の事實なのである。佛陀の實在、因果の必然等々、皆現前の事實なのである。誠に宗教の説く所は、事實ながら、五官に想へるのとは違つて、心に俟つて感得すべきものだけに、得て狂ひを生じるのである。宗教が事實として受け入れられれば、本當に生活に安住し、日常に感謝して生き得るのである。たゞ、それは云ふに易くて、受けるに難いことには相違ない。事實を事實として認むべく、餘りに煩惱が張すぎて、心の鏡をくもらすからである。

蓮月は幕末の女流歌人である。夫蓮にめぐまれず、子供とも早く死分れ。その他かづくと、人生にはシタカにうたれたのであつた。淋しい孤獨の生活を陶器を鬻いで生き清貧に徹して清く高く静かに一生を終つたのである。蓮月の歌集には、宗教生活の安住境を如實に示す歌が、そこに見出されるのである。

自分は數年前の晩春初夏の候、春蟬の聲を聞きながら、その洛東庵居のほとりを歩いて、そぞろに昔の高風を偲んだことであつた。尼の歌二題を掲げて贅言にかかる。宗教が概念にとどまらずに、生きた事實として受け入れられよば、尼の歌の如き心境にまで到達することが出来るのである。そして、そこは何等の奇もない、淡々たる境地である。朝があければ生活の陶器を造り、暮が迫れば、みほと

けをおがむ計りなのである。あたへられた生活に安住して死の前に座ばかりの雲もないのである。

述懐
あけたてば　墻もてあそび　くれゆけば

辭世

ちやばかり　心にかゝる　雲もなし
佛おろがみ　おもふことなし

五、岩上さんの死

約五年の間、不自由な病床に親んで居られた岩上浦三郎さんが、終にみまかられた。御病氣が御病氣なのでさう急變もあるまいと思ひ込み、且つは發聲に相當苦しまれるやうなので、近頃ではわざと遠慮して時々手紙で御見舞する程度にしてゐた處、俄に急變の電話を受けて、事の意外にたゞ驚くばかりであった。

生前の岩上さんは、可成往來した。よく一所に信仰の集りへ出たのも、今はなつかしい思ひ出である。岩上さんは若い時から荒い海上生活に終始して來た人である。しかし、私が間近く接した岩上さんのどこのはしにも、一更そ

も云ひたいやうな、非常に純な處があつたのである。會合の席上、何かやりそないでもされた時、頭をすくめて大いに恐縮がられる處などは、誠に親しむべきものがあつて、これが古稀に近い人の處作とは思へぬ位であつた。岩上さんの心の中には、人生の暗さにけがされぬ純な明い一面があつたのである。この純真さこそが、岩上さんをして老いて益々道を求めしめたのに相違ない。

岩上さんは、熱心に信仰を求められた。同じ系統の信仰の集りへは、どこへでも、又いつでも出席された。それも強いてつとめて、されたのではない。喜々として樂んできたのである。已れの法悅を人に分ちあたへんとし、日を選んでは法師を招いて法筵を張り、自宅を喜んで開放して、聽聞の人の一人も多からんことを計られた。われも信じ、ひとにも信せしめんとされたのである。岩上さんは、世間的には道徳の所謂成功者である。出世的には、喜び喜んで佛法を求められた。世出兩道の人なのであつた。

その岩上さんも、今生、已になし。こゝに又、一人の尊き道の友を失つたことを、淋しく思はずには居られないのである。

六、利休の歌

茶道に於ける千利休に就いては、茲に改めて申すまでもあるまい。衆の皆知る處である「利休百首」なる一冊があつて、茶道修得に關する利休の歌一百首を集輯してある。この中には、私共の求道上に種々教へらるゝ處の多い歌が相當に見出されるのである。

茶道は勿論茶道なのであつて、これを世間でよくやるやうに、修養の手段にしたり、宗教の一貫などとするのは、全く面白くないことである。しかし、再び退いて顧みる時茶道も所詮一つの道なのである。佛道亦一つの道である。兩者の間に、暗々に相通する一脈のあることは、否み得ないわけである。そんな意味で、我々の求道上に参考になりそうな處を「利休百首」の中から十首足らず拾つて見ることにする。佛典や祖書とは、又自ら違つた趣があるのである。表現平易にして、何等の加言を要さないのである。

○その道に入らんと思ふ心こそ 我身ながらの師匠なりけれ

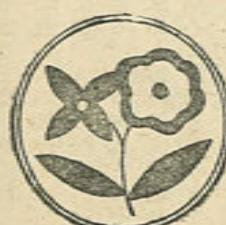
○習ひつゝ見てこそ習へ習はずに よしあしいふはおろかなりけり

○こゝろざし深き人にはいくたびも あはれみ深く奥ぞ教ふる

○はぢをすて人に物とひ習ふべし 是ぞ上手の基なりけ

○稽古とは一より習ひ十を知り 十よりかへるものとのその一
事と知るべし
○もとよりもなきいにしへの法なれど 今ぞ極まる本來にせよ

○規矩作法守りつくして破るとも 離るゝとても本を忘るな
○茶の湯とはたゞ湯を沸し茶をたてゝ のむばかりなるの法



時局認識徹底方策

(昭一四一四・二七國民精神總動員委員會決定に基く)

國民精神總動員新展開の基本方針に基いて、時局認識の徹底方策を講ずるに當りては、支那事變の本質に對する透徹せる認識に基き、國內外に於ける實際の情勢と之に處する我國の根本目的並に其の實現方策を普く全國民に浸透するやう各方面に對して、具體的且つ有機的に知らしめ、「成程、日本は今容易ならぬ場面に臨んでゐる、世界史上一大時機を劃する最も重大な地位に立つてゐる」といふことを充分自覺せしむると同時に、「我が皇國の興廢は一に懸つて事變處理の如何に存する。如何なる苦難を忍んでも堅國の精神を世界的に發揚するやう、國民相共に誓つてこの光榮ある任務を成し遂げねばならぬ」といふ決意を固めさせ、以て國民の全能力を集中發揮して、強力日本を建設しなければならぬ。

一、何を徹底すべきか

(一) 興亞大業の意義と帝國の使命
東亞全局の安定、世界永遠の平和の爲にする東亞新秩

序の建設は、帝國を中心として「日滿支三國相携へ、政治・經濟・文化等各般ニ瓦リ五助連環ノ關係ヲ樹立スルヲ以テ根幹トシ、東亞ニ於ケル國際正義ノ確立、共同防共ノ達成、新文化ノ創造、經濟結合ノ實現を期スルニアリ」(昭和十三年十一月三日 政府聲明) これこそ我が肇國の大理想に源流する未曾有の大業であつて、之を完成することは、現代日本國民に課せられたる最も榮ある責務であること。

(イ) 支那事變の本質

本次の支那事變はその由て來る處遠く、國民政府多年の抗日侮日の根柢に横はる思想は、我が國體と相容れるものであつて、事變の深刻なる所以亦此處にある。從つてこれが解決には國民政府を徹底的に潰滅して、東亞的新秩序を建設しなければならぬ。而して東亞新秩序の建設は、日滿支三國の互助連環關係の樹立を基調とするが、飽く迄も日本が指導者であることを念としなければならぬ。

(ロ) 東亞に於ける國際正義の確立

東亞の安定は世界政局上最も必要なことであり、之を實現することが、國際正義の確立である。而して先づ植民地的狀態から東亞を離脱せしめることが、東亞に於ける國際正義確立の第一歩である。

(ハ) 共同防共の達成

(1) 防共協定は、今後強固ならしめねばならぬ。
東亞に於ける共同防共を確立しなければならぬ。即ち支那共産黨を撃滅し、其の他の東亞各地に於ける共産的分子を掃蕩しなければならぬ。

(ニ) 新文化の創造

新文化創造の要諦は、日本文化を發揮して東亞を撫育するに在る。即ち一方に於て日本文化を益々醇化發達せしめると同時に、その日本文化を以て、支那文化其の他に新生命を吹込んで更生再建せしめる所に存する。

(ホ) 東亞經濟プロツクの結成

東亞新秩序の建設は、東亞經濟プロツクの結成に俟たねばならぬ。それには日本の指導的立場の確立が根本である。即ち日本經濟の強化を圖ると共に、これに基

いて他の經濟を指導すべきである。日本と他との關係は、相互扶助の經濟關係を確立するにある。

(二) 國際情勢の變遷と日本の決意

(イ) 援蔵諸國の動向に従事し、帝國の意圖する國民政府の潰滅、東亞新秩序の建設に對する第三國の干渉に對しては、相手の如何を問はず、斷乎としてこれが排除に當る國民的決意を確立せねばならぬ。

(ロ) 世界は今や再び世界戰争への危機に直面している。この騒然たる國際情勢に處する我國としては、獨自の立場に據り、東亞に於ける唯一の強大國としてその指導的地位を確立し、以て東亞全局の安定に努力邁進しなければならぬ。

(三) 長期建設の遂行と國力の充實

以上に列舉する大使命を負擔し、長期建設を遂行する爲には、國家總力の飛躍的増強を期し、就中國防特に軍備の充實を圖り、これに伴ふ經濟上の難局、戰時財政の實體を正確に理解し、當面に於る物資需給、物價調整等の諸問題を克服し、國家總動員體制の確立、生產力の擴充に努むること。

二、如何にして徹底すべきか

(一) 以上の點に關し政府は常に時局の進展に應じ新事態の發生とこれに伴ふ施策とを一般國民に向つて、速かに諒知させること。即ちこれがためには、官民各部の啓發宣傳機關を總動員してあくまで實効を期すること、殊に權威ある實踐網の整備確立を急ぐことが最も重要である。

(イ) 啓發宣傳の徹底

官民各部の啓發宣傳機關、別けても新聞雜誌の全的協力を更に強化すること。

(ロ) 實踐網の整備確立

權威あり最も信頼し得る實踐組織を、國民各階層の間に整備充實することが喫緊の急務である。
(1) 既にその整備を見たる方面にありては、これが運用を萬全ならしむること。
(2) 中央、地方共に實踐網指導者の養成施設に力を用ふること。
(3) 指導者の選任には特に意を用ひ、眞に適材をこれに當らしむること。

(二) 都會生活の特殊性より生じ易き人心の弛緩を克服し、その緊張味を醸成するため、國民の時局認識に進行する様な政治的社會的その他の不健全現象を絶滅す

ること、たゞ之が爲に市民生活の萎微退墮を來すことなき様、常に激刺たる意氣を振作する施設に留意すること。

三、實施上の注意

以上の實施に際しては、次の諸點について一般の注意を加へつゝ、その効果を確保せねばならぬ。

(一) 官民各部の啓發宣傳機關の總動員に當つては、相互に矛盾の起らぬ様調整すること。

(二) 時局認識の基く實踐は形式に流れる事を排する。苟も上記りがあつてはならぬ。實質的に且つ具體的に各地の情勢に應じ、國民各層の實生活に即せしめねばならぬこと。

(三) 時局認識徹底の効果を隨時検討すると共に、從來の方法について此際再検討を試み是正すべき點は速かに是正すること。

(記)

(事)

本部團報

幹部會 先月廿八日開議決定の「時局認識徹底方策」等に關し、一ヶ月後の五月廿八日午前十一時より本部に於て役員の協議懇談會を開催し、時代對應の教化及び教義上の研討に午後二時迄熱誠に議を掠り、二時より日曜例會に移る。

因に當局に於て決定されたる物資活用並に消費節約の基本方策の要點を摘要すれば、

- 1、簡素生活の實踐
- 2、物資の愛用
- 3、空閑地、荒蕪地の活用
- 4、全面的消費節約
- 5、不急品、不用品の活用
- 6、廢品の回収
- 7、金の集中
- 8、貯蓄の實行

理事移動 本團理事岩上浦三郎氏は、兼て病憊療養中の處去五月廿八日午後七時、祖書經文の通りの美はしい最後を示現して靈山に往詣された。享年七十二歳。氏は朽木縣新合の出身で、十八歲志を立てゝ上京し、一丈夫の卑職より忠實奮勵、獨力苦學、後海上生活に轉じ遂に最高の機關長に累進し、日露戰役の功に依り勳六等に叙せらる。大正十五年退職の後は深く本多大僧正に歸依し、大に顯本法華の妙旨を擁護し、本團の結成に際しては直ちに多額の浮財を喜捨し、集會には必ず列席大に努め、昭和九年六月選ばれて理事に就任されて已來、今日に到つたものである。世間

に於ても模範的の尊い存在であつた。今最後の大きな教を賜して逝かれた事は、洵に名残り盡せぬ憾で、虔て御回向御冥福を祈り奉る。

法規に據つて補缺選舉の爲め、六月十八日午後一時本部に維持會を開催し、其の結果和賀義見氏選舉就任のことになつた。

日曜日 午後二時より五時迄毎週の例會は彌々熱誠な淨信が續けられてゐる。

月曜朝 每週朝五時半から約一時間同心會有志を中心とした勤行會が營まれ、一同朝食後法話懇談に華が咲いて和氣堂に滿ち、やがて夫れゝの勤務に出動される。參加希望者は隨意御列席自由である。

御書講座 日蓮聖人五大部中撰時抄が、毎週火曜日晚六時半勤行、七時から八時半迄、小林一郎先生に依つて講説されてゐる「先生の御説義の本を讀みましたが、矢張り眼前にお話を拜聽すると一層有難く領得され、モット早くから伺へば宜しかつたのに」と述懐された方が昨日あつた。道を求むる上に於て遠慮は禁物である。勇敢に來聽すべきである。「佛に成る道は善知識には過ぎず、我智慧何かせん、只溫寒計りの智慧だにも候ならば善知識大切なり。而るに善知識に値ふ事は第一の難き事なり、然らば佛は善知識に値ふ事をば、一眼の縫の浮木の穴に入り、梵天より下す糸の大地の縫の目に入るに皆へ給へり。然るに末代惡世なし」等。

福島支部報

六月十五日夜 大町中村様方にて、磯部先生より前回に續き法華經述門の中心たる方便品の御説話を戴き、一心三觀三詩に関する御懇切なる御説明あり。又我々が眞剣に御題目を唱へれば、如何なる精神的肉體的苦しみも克復する事が出來、法悅の生活に安住することを得ると説かれた。

六月十六日 高商如春莊にて鐵仰會例會を催す。磯部先生は我々の生活の基本として正しい信仰がなければならない又信仰をして行く上に於ては種々の困難が起るものであるから、最初の決心が大切であると御説明された。それから進んで日蓮聖人の護法愛國心の發露たる立正安國論に関する御説話を戴く。

國家の將來を想ふ時、我々は立正安國の覺悟と、信心倍増の決心を一層深くせざるを得ない。

此等は畢竟するに正しき宗教の信仰に據り、各自の佛性を啓發し、菩薩の願行に勇精することが根本となるまい、それが當面のみならず永遠の福祉を致すであらう。

團費誌料維持費及寄附金領收

(至五月二十一日)

一金貳圓五拾錢也

六〇
東京　内倉治　吉殿
大阪　澤田萬壽　穂殿
熊本　平岡義　雅量

金貳圓五拾錢也
一金 拾 圓 也
一金 貳 拾 四 也
一金 六 圓 也
一金 貳 圓 貳 拾 錢 也
一金 拾 四 也
一金 貳 圓 貳 拾 錢 也
一金 五 圓 也
一金 五 圓 也
一金 貳 圓 五 拾 錢 也

金貳圓五拾錢也
金貳拾圓也
金六圓也
金貳圓貳拾錢也
金拾圓也
金貳圓貳拾錢也
金五圓也
金五圓也
金貳圓五拾錢也
金貳圓五拾錢也
金貳圓五拾錢也

同 同 東 名古屋 東 札 横 同 東 青 東 橫 演 同 同 東
京 京 幌 濱 京 森 京 演 京 京 京 京

熊井康人殿
森山太郎殿
吉田敏夫殿
中村のぶ子殿
柏木吾市殿
山下忠治殿
池澤泰明殿
和泉起世殿
京田爲太郎殿
林啓太郎殿
牛田共保殿
水也田呑洲殿
荻野慶三殿
深澤紀文殿
萩野慶三殿

一金參圓也
一金貳圓貳拾錢也
一金貳圓五拾錢也
一金參圓七拾錢也
一金貳圓貳拾錢也
一金貳圓五拾錢也
一金拾圓也
一金五圓也
一金貳拾圓也

東京 和歌山縣 伊藤 乾涼 南端
東京 同 同 同 何某 殿
福島 東京 神田彦三郎 脇殿
金澤 利江 沼部彌太郎 脇殿
山田 英二 柴田 武治 沢殿

右難有領收仕候也
（以是代領收證）

財團法人統一團會計

灌洗佛形像經

第十套の七

西晉沙門釋法炬譯

佛の言はく、好香を持して佛の形像を浴せしめば、自ら其の福智を得、清淨の功德名聞在り。諸の好華を持して佛の上に散せば、自ら其の福を得、端政の好色雙比ひ有ることなし。諸の繪幡を持して佛に上らば、自ら其の福を得、從生の所に在つて當に自然に好衣無極を得べし。佛の言はく、我れ功を累ね德を積み行善至誠、持戒、忍辱、精進、一心、智慧を乃し自ら致し作佛することを得たり、今日賢者某甲、皆慈心好意を爲し、佛道を信向し、度脱を求めんと欲して種種の香花を持し佛の形像を浴す。

灌洗佛形像經

浴像功德經

第十套の七

大唐天竺三藏寶思惟譯

善男子よ、若し像を沐せんと欲せば、應に牛頭栴檀、紫檀、多摩羅香、甘松芎藭、白檀、鬱金、龍腦、沉香、麝香、丁香を以てすべし。是の如き等の種種の妙香を以て所得の者に隨つて以つて湯水を爲し、淨器の中に置く、先づ方壇を作り、妙牀座を數き上に佛を置きたてまつり、諸の香水を以て次第に之を浴し、諸の香水を用て周徧し訖已つて復た淨水を以つて上に淋洗し、其の像を浴せば各少許の洗像の水を取り、自らの頭上に置き、種々の香を焼き以つて供養を爲す。初め像上に水を下すの時、應に誦するに偈を以てすべし。

我今諸の如來を灌沐す

五濁の衆生垢を離れしめ

燒香の時は當に斯の偈を誦すべし

戒定慧解知見の香は

願くは此の香烟も亦た是の如く

浴像功德經 �畢

十方の刹に徧く常に芬馥たり

自他の五種の身を廻作せん

淨智功德の莊嚴聚

願くは如來の淨法身を證せん

浴佛功德經

第十套の七

六九七

大唐沙門釋義淨譯

若し像を浴せん時は、應に牛頭栴檀、白檀、紫檀、沉水、熏陸、鬱金香、龍腦香、零陵藿香等を以てすべし、浮石の上に於て磨して香泥を作り用つて香水と爲し、淨器中に置き清淨の處に於て好土を以て壇を作り、或は方或は圓、隨時大小上の浴牀に置き中に佛像を安じ灌ぐに香湯を以つてし、淨潔洗沐し重ねて清水を澆き所用の水は皆須らく淨滌すべし、蟲を損ぜしむること勿れ、其の浴像の水を兩指に瀝取し、自の頂上に安じ吉祥水と名づけ、淨地に瀉して足蹋せしむること莫れ。細軟の巾を以て像を拭ひ、淨ならしめ諸の名香を焼いて周徧香馥し、本處に安置す。善男子よ、是の如く浴佛像を作すに由るが故に、能く汝等天の大衆は、現受富樂、無病延年ならしめ、願求する所に於て意に遂げざること無く、親友眷屬悉く皆安隱にして長く八難を辭し、永く苦源を出て、女身を受けず速かに正覺を成す。既に安置し已らば更に諸香を焼き、像前に親對し虔誠合掌して讚を説いて曰く、

我れ今諸の如來を灌沐す

願くは彼の五濁の衆生類

戒定慧解知見の香は

願くは此の香烟も亦た是の如く

亦た願くは三塗苦輪の息を

皆無上の菩提心を發こして

淨智功德の莊嚴聚
速かに如來の淨法身を證せん
十方の刹に徧く常に芬馥たり
悉く除熱せしめ清涼なることを得ん
永く愛河を出て彼岸に登らん。

浴佛功德經 毕

本多日生上人著書特價提供

聖語錄 改版

法華經要義 開天覽

日蓮主義心髓

日蓮主義精要

眞理の基礎に樹つ佛教の信仰

法華經要品

日生上人レコード(西語)

本尊意識に就て

釋尊の八相成道

法華經の心髓

河合勝明著

本多日生上人

勸行作法

佛教の心髓

河合勝明著

本多日生上人

勸行作法

佛教の心髓

河合勝明著

皇道と日蓮主義

送料共價

金 壱 團

全 全 特
送料共價

金 壱 團

全 全 全
送料共價

金 壱 團

金壹圓八拾錢

金貳圓五拾錢

金貳圓五拾錢

金貳圓九拾錢

金拾五錢

金五拾錢

金貳圓廿五錢

金貳圓五拾錢

金貳圓七拾錢

金壹圓七拾錢

七十ノ六町羽音區川石小市京東
部版出團一統 法財人團

番〇二四九京東替振

不許複製	注	價定一統
	▲御申込ハ越テ前金ノ事 御候居ノ場合ハ必ズ新舊共直ニ御 通知ノ事	一 年 金貳圓拾錢 金貳圓貳拾錢 送料共
昭和十四年六月二十七日印刷納本		
昭和十四年七月一日發行		
(第五百三十二號)		

東京市小石川區音羽町六ノ十七
發行人 碩 部 満 事

東京市四谷區内藤町一
印 刷 人 山 田 英 二

東京市小石川區音羽町八ノ十一
印 刷 所 野島好文堂印刷所

電話牛込五三三六番
電話牛込六九六六番
總務東京九四二〇番

發行所 法人團 一
總務東京九四二〇番

電話牛込五三三六番
總務東京九四二〇番

次 目

佛教の根本と其の應用(其十二).....	本
開目鈔講話(承前).....	小
理想と現實.....	守
本尊曼陀羅の意義(五).....	河
追孝第一義.....	磯
記事	
○本部團報	○福島支部報
○團費誌料寄附金及維持費領收	
大藏經要義續篇(其十六).....	
本	
多	林合屋
日	貫一日
生	明教郎生

號月八 年四十四第

14/10-26

